新井周吉訂正
江原近平編輯

# 速成教育 作文大觀

埼玉小學雜誌社

特19
48

# 例言

一此書ヲ編ムノ始ハ單ニ埼玉少年ノ作文ヲ集メテ一小册子トナス意ニ過キサリシナリ然ルニ中頃ニシテ以謂ク單ニ少年ノ作文ヲ集ムルハ文範ヲ示シ且ツ理化金石及修身地理等ノ學術欄ヲ設ケ挿繪小話遊戯法等總テ少年子弟ノ耳目ヲ喜ハシメ知ラス々々智識ヲ開發シ得ルノ少年書類トナスニ如カサルナリト乃チ新井氏ニ乞フテ此書ヲ成セリ

一此書載スル所短篇隻句概チ連絡ヲ保タシメサルモノハ尋常乃至高等小學科教則中ノ補遺ニ充ツヘキ事實ヲ廣ク網羅セントシタレハナリ

一之ヲ要スルニ此書ハ家庭用少年獨學用ニハ勿論學校ニ在リテ講學ノ餘暇正課ノ傍ラ或ハ風雨ノ爲メ校外ノ運動ナキニ當リ生徒ヲシテ開覽展讀セシメハ少年子弟ノ才ヲ育シ智ヲ開クモノ必ス多カラン

明治二十五年三月

編者しるす

# 速成教育 作文大觀目錄


◎作文科
●作文の話　●日用文範　●少年文叢　●曲詩

◎人口膾炙詩歌
●和歌　●今様　●發句　●詩　●新體詩歌

◎脩身科
●蟻と蟋蟀　●孝子の下駄　●太陽と長安の遠近

◎頓智
●車夫の頓智　●十露盤割出し話

◎記事文
●作例　●文題　●少年文叢

◎ 讀書の枝折
●かなの用ゐ方 ●句讀点 ●讀本中の符號
◎ 遊戯
●智慧札並の法 ●奇術 ●舞た〳〵
◎ 習字科
●執筆法 ●大字と小字 ●永字八法
◎ 人口膾炙 詩歌變體
●折句 ●鸚鵡 ●回文歌 ●四十七字歌 ●和歌ト發句ト詩 ●落書
◎ 小話
●一ト口噺 ●蕎麥の化馳走 ●青物年季証文之事
◎ 唱歌門
●小野道風奮勵の歌 ●忠臣 ●た國の光

速成教育 作文大觀

# 作文科

新井周吉訂正
江原近平編輯

## 作文の話

數人れ葢子相集ふて作文の法を物語るあり

甲吉文と作るに簡短なる者と複雜なる者との區別ありとか聞きつるか其例如何

乙次これを區別するは甚た容易なり例へハ

單文

仝　わさくし ハ ふでをもつ

わたくし ハ かみをもつ

複文　わたくし ハ ふでとかみをもち　ふでにて　かみにじをかく

甲吉了解せり然とも尚　辭に　過去　未來の區別ありとか聞けり君其區別を知れりや

乙次　然り曾て學校に在りて學びたる事あり過去の文には動詞の終りにたりの辭を添へ未來の文よは動詞の結びよん辭を添ふるを常とせり

以上互に問答そるか如く作文を修むるには能く文格を知るを要そ故に文を作らんとそるよは

第一　題意を練る事

第二　文格を正そ事

第三　字句を吟味そる事

を以て尤も大切なりとなそべし偶々乙次　甲吉　道三等日用往復文の練習を試みんとて（温泉に行くを告る文）といへる文題を出せり既よして三人共よ草稿を示し合せて互よ評論するを見るに

道三の文ハ

此間御話し致置熱海へ出立之儀愈明後日と相定候に付此段御知らせ申上候



乙次の文ハ

私儀療養の爲め明日出立伊香保温泉へ入浴ゐ罷越候間此段御通知申上候尤も逗留の儀は三週間の見込よ御坐候

甲吉の文は

小生儀本年ハ是非共箱根温泉へ入浴致度存居候處幸ひ友人某より同行申來候よ付明後日より大凡四週間の見込を以て出立入浴仕候間此段不取敢御報知申上候也

とあり簡短なる文ハ　道三の作よして甲吉の文ハ複雜なる者也　乙次は軈て甲吉よ向ひ

乙次僕ハ（約定違變を責むる文）といへる文題を闘はさんと欲そ而して文体は

雅文　俗文　人々の好む所に任さん

と蓋し作文には雅文体あり俗文体あり或は談話体譯文体等あり其細しきは師に就て學ふへし

# 日用文範

○開店を報ずる文　（報知文範）

先日種々御心配相掛け候蔭を以て物品の仕入も略ぼ相整ひ候に付彌々來る何日より開店營業仕候ゑ付尚此上も万事御心添へ下され度御禮旁御報知申上候也

○仝　返　辭

彌々來る何日御開業之趣御知らせ下され全く多年御忠勤之結果今日ゑ現われ候事と賑々敷御繁榮を御祝申上候

○洪水見舞之文　（見舞文範）

存外の大水にて嘸々御困難の事と存上候就てハ此品粗末なから御見舞之兆迄呈上仕候

○仝　返　事



俄之出水ゑて大ゐ驚き入候處幸ひ流失物も少く家内一同無難ゑ立退き申候に付御安心被下度候右ゑ付御見舞として何よりの品御贈被下難有受納仕候

○暑中見舞の文　（女子用文）　埼玉縣　幡羅郡妻沼　柳澤とよ

一筆示しうる〜土用中とはヤなから當年は別てゐ暑さ強くしへとも皆々様ゐ變りなふゐ揃ひゐ機嫌よくゐ目出度存上うる〜此しな餘り些少にはしへ共手製にまかせ暑中見舞の兆として差上いまふゐ受納を下度念し上うる〜ならくしもし

○仝　返　詞

ゐ女の様有かさく拜見致しうる〜是よりゐ伺ヤ上へくの處却てゐ尋にあつかり万々恐入しへ仰の如く當年は殊の外甚暑ゑはしへ得共先々ゐ揃ひゐ機嫌能くゐ凌き遊はされし段ゐ目出度存上うる〜時節ゐ見舞として結構なゐ品ゐ贈りヤされ誠に〜有かさく一同打寄ゐ賞味いたしへ何れ參上の節万々ゐ禮ヤ上へく先はゐ請まてあらくヤうる〜

○燈下對讀を約する文　（約束文範）

追々短日ゑ相成候ゑ付明日より毎夜私方ゑ於て小學讀本を對讀致度存候貴意如何ゑ返答下され度候

○幻燈會へ誘ふ文　（誘引文範）

明夜某學校に於て幻燈會有之候由晩景より ゑ同行ゑ一覽如何に候哉ゑ誘ひゆ上候也

比企郡小川町　中島春吉

○仝返詞

貴翰拜誦仕候今晩幻燈會へ御誘ひ下され御厚情之段有かたく存候他の與行事と違ひ幻燈會は多少教育上の助けと相成申へくと存候ゑ付是非共御同行願ふ所に御座候

○汽船積荷の手續を尋ぬる文　（照會文範）

平日は御無沙汰に打過き要事出來の節のみ御面倒申上候段御勘辨下され度候扨私事所用有之近日の中大坂表へ罷越申度就ては荷物も澤山有之候ゑ付汽船へ積荷仕度存候處其手續不案内にて當惑罷在候間御面倒なから詳細御知らせ下され度畧議あから



書狀にて御願申上候頓首

仝返辭

貴狀拜見仕候御ゆ越相成候汽船積荷之儀は別ゑ面倒なる次第ゑ之なく屆け先きを明にし東京濱町河岸何〻廻漕店へ御差出し相成候〻諸事都合よく取扱ゆとへく私方にても毎〻同店へ托し運送致させゆ候先は御返詞のみ再拜

○招かれし後遣す文　（寄送文範）

昨夜は閑らを御馳走ゑ相成千万有かたく存候隨て此品輕少なから御禮の印まてゑ差上ゆ候

○徵兵入營する人ゑ遣す文　南埼玉郡　尾崎喜一郎

貴兄應徵明後日高崎へ御入營之由勇しく御出途を祝し候貴兄は平常身体强壯にして往來機敏の生い立ちゑ有之候ゑ付後來の榮進豫め期し得られい依て經節一連御餞別之兆として差上ゆ候

○埼玉小學雜誌を借に遣はす文　（女子用文）

一筆申上候〜さておなさ様方は埼玉小學雜誌御購讀なされいよし何とも申上兼いへ共もし御覽濟分おはしましいさし度此使さ渡し下されいさいとも〜有かたく存上候〜

○書畫を分與する文　（贈與文範）

此書畫西京より取寄候ゟ付面白らす候得共御配分申上候万一御慰さも相成候へは幸甚々々

○佛事さ人を招く文　（招待文範）

來何日は先祖誰之百年忌に相當り候に付法事營度候間御參詣下さるへく候

仝　返　詞

御先祖誰様の御年回ゟ付御佛事御執行成され候由右さ付御案内下され添く參詣仕へく候



○茶の見本を求る文　（請求文範）

自家用及び客來用とも何れも六七貫目つゝ買入申度候さ付至急見本御廻しなを下度候

○雇人の周旋を賴む文

寸書を以て願入候先頃より下僕一人雇度存居候處未た見當ら申さ候候さ付若し御心當りの者有之候ゝ御世話願度候

○竹を乞ふる文

庭前へ植付度候さ付誠さ申兼候得共淡竹二三本頂戴致度候

仝　返　詞

淡竹御所望之段承知仕候併し此節ハ植替さ宜しからぬ候間暫らく御見合せ然るへく存候

○仕立屋を問合す文　（女子用文）

一筆申上候〜さて先日御前様方さて拜見いさしい羽織い何ぞの仕立屋へ申付な

されいふや私事も是非相たのみや度と存じまゝ御知らせ下され度願上奉り

○晏起を戒む文　（勧戒文範）

貴君平生御目覚後るゝ之由總て一日の事業は朝起の遲速ゑ關する者ゑ有之候得共以後は成丈御注意相成候樣致し度失禮なから此段ヤ上候

○養蠶を勸むる文

養蠶は有益の事業ゑ有之候へは成丈け御注意御手廣になされ候ては如何

仝　返　詞

仰之通養蠶ハ副業として至極農家ゑ適當なる業務ゑ候得ハ追々擴張致ほへく候

○轉宅を祝する文　（祝賀文範）

承り候へハ此度其地へ御轉宅之由定めし商賣も舊ゑ倍し御繁榮之事と悦ひ居候此小魚一籠御祝の印迄ゑ差上候

○賞牌の下賜を賀する文

拜啓豫て御工夫の糸取器械今般內國博覽會に於て賞牌御拜受のよし多年之御丹精今日にあらわれ候事と奉賀候

○開業廣告　（廣告文範）

一何々商

右今般開業仕精々廉價を以て調達可致候に付陸續御用ゑ仰付度此段廣告旁奉希候也

何之誰

○解雇廣告文

右今般解雇候ゑ付向後一切弊店に關係之れなく候ゑ付此段廣告候也

○歸縣廣告

拙者儀久しく上京罷在候處昨何日歸縣仕候ゑ付此段辱知諸君に告ぐ

○死去廣告文

老父儀永々病氣之處昨何日死去候ゑ付此段生前辱知諸君に告ぐ

# 少年文叢

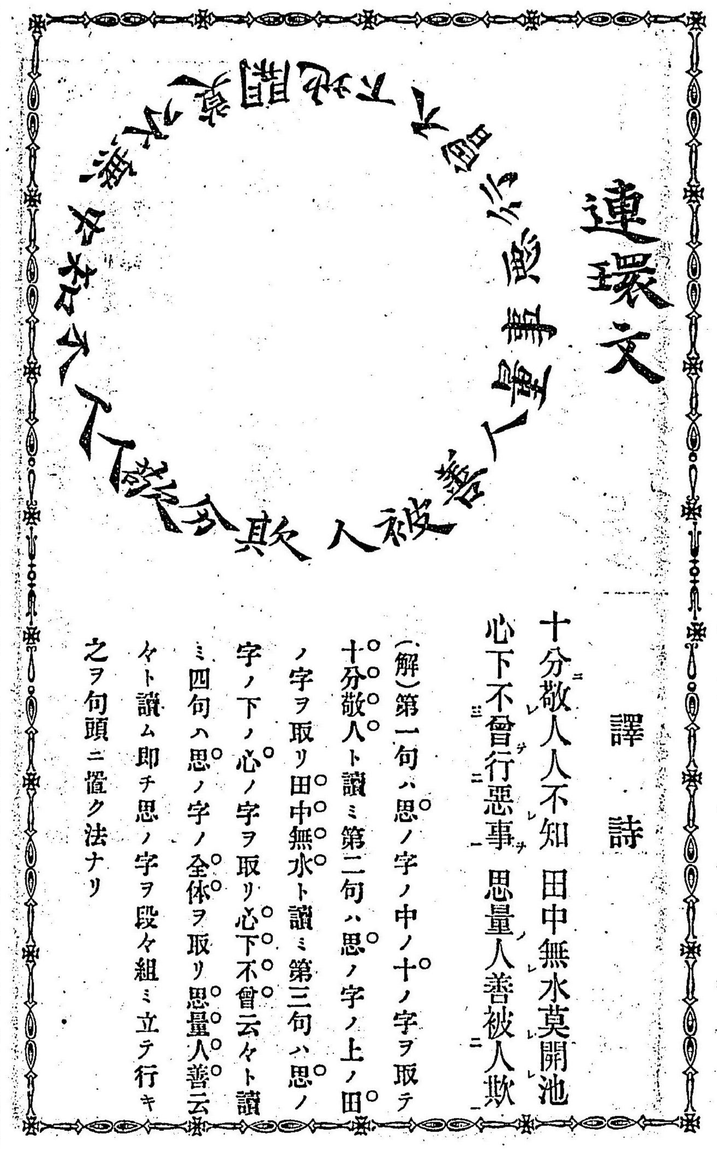
## ○月見ま友戍招々文

北埼玉郡
持田村大字持田　西田國三郎

一筆申上候今宵は舊暦の九月十三夜に相當り申し生等の雅臭未だ風流れ何事たるを解し申さずし得共いつも〳〵十五夜には曇りのみにて殘り多くし〻に打て替て今夕の樣子何となく四方晴〳〵しく纖雲だにもこれなく珍しき氣合にては隨分清光も之れあるべくと存ド其に就て小生不意ま月見會を催し仰て明月を賞し俯して機山公の兵馬倥偬の間にありてしかも綽〳〵として餘裕あるの風流ま倣ひ互ま胸襟を談し文を鬪せ度心得に付何の用意御座なくし得共夕刻より淸光來被下度待上奉りし

評　雅文

# 連環文




## 譯詩

十分敬人人不知　田中無水莫開池
心下不曾行惡事　思量人善被人欺

（解）第一句ハ思ノ字ノ中ノ十ノ字ヲ取テ十分敬人ト讀ミ第二句ハ思ノ字ノ上ノ田ノ字ヲ取リ田中無水ト讀ミ第三句ハ思ノ字ノ下ノ心ノ字ヲ取リ心下不曾云々ト讀ミ四句ハ思ノ字ノ全体ヲ取リ思量人善云々ト讀ム即チ思ノ字ヲ段々組ミ立テ行キ之ヲ句頭ニ置ク法ナリ

## ◎欠席の友に遣る文

大里高等小學校四年生　馬場金四郎（十五年）

一書拜呈貴兄事先月來登校無之よ付心配罷在い處仄に承るに近頃遊惰の魔風に誘れ毎日無爲逸樂の遊淵に漂ひ碌々消光致され居候由平素御精勵の貴兄四方やかゝるは非狀は有之間敷と信心罷在い處今更驚愕仕い未だ少壯進取の妙機寸陰を爭ふの時加ふるに英敏の渉資質を以て空々時を失するは啻に貴兄の爲のみならず國家の爲め迚も深く惜む處ゐ渉座い人間一生の顯揚卑賤は必竟少壯勉惰の結果に有之古人も壯年易老光陰不待人と惟ふに最能く吾人を醒攪するの警語と奉存候就ては貴兄も蹶然志を改め微妙なる良心の指導に隨ひ有爲難苦の學海に棹ゑ孜々勉勵琢磨の功と積み天晴れ國家の大器となられい樣伏して奉懇願候百拜

評　宜爲少年左右之銘

## ◎欠席乃友に遣す文

埼玉縣入間郡豐岡町黑須　同交會員　古谷喜十郎（十五年）

寸楮拜啓仕候陳者貴君頃日は學校も欠席勝にて平常の渉心掛にも似す驚入候小生の中迄

も無之追々本邦も文明の域に進み上ハ外國と對等の權力を爭ひ下ハ業務の如何に係らす誠に繁雜なる世の中と變化仕候此煩雜なる世の中に立ち安全世を渡るハ是非共智識の船を要する事と存ぜ候而して此智識ハ如何して得へきか是れ即ち學問に依てはそ初て成者に御座候小生嘗て老人より誨を受けし事有之候其言に曰く人は幼年に於て宜しく勉學す可し老後螢雪の勉强寸効なし宜く刻苦すへし後悔は前に立たすと誠光陰かれやゝ去る幼年の寸陰は千金ゟ勝る價値を有する事と存ぜ候就てハ貴兄ゟも篤と是ゟ注心を下御心を改明朝は早速御出席被成以後御勉勵の上前過を償れん事を偏に希望奉候斯く御改心被成候得ハ御両親様を初め御兄上様の御悦一方ならず子たる者の孝行不過之候先ハ平日の好誼に任せ御怒と顧ず右申上候問是非共御採用被下度不堪切望候餘は通學の序御面會致萬々可申述候草々頓首

## ○欠席乃友人ゟ遣す文

秩父郡第三高等小學校生四年級　宮澤寅雄　明治十一年六月生

寸楮啫陳ハ爾來契濶に打過ぎ候偖て賢兄夏期休業後絶て御出席無之野生も誠に張合御座なく候右は何等の次第にや承はれど別して御不快等にも無之由足下にして斯かる擧動ハ甚だ以て不審に堪へぎ日々憂慮致居候已に曆史理科等駿々として相進み其他英語に算術に特に讀書の如き暗記ものと違ひ聽講せざれハ不都合と考へゟれ候に付速に御出席可被成候然すれハ足下御一人の幸福のみにハ無之我々同級生に取りても競爭心を增し大なる裨益と相成候右樣の事ヲ上候ハ恰も孔子に德を說き釋迦に道を示そが如く耳騷がしく候へ共善を責むるハ朋友の義務と相心得不顧失敬候間何卒御取捨被下一日も早く御出席被成候樣御勸誘ヲ上候謹白

評　同級相思宜如此

## ◎◎馳走ゟおそし禮の文

南埼玉岩槻　新井永次

手紙を以て申上候陳は昨夜はハ招き下さる種々ハ馳走に預り其上歸りの節ハ提灯迄ハ貸し下されハ蔭を以て無滯歸宅仕誠に難有奉存候此品輕少なからハ禮れ印までに進呈仕候間御受納被下度候早々頓首

## ◉不勉強ノ友ヨリ遣す文

比企郡八和田村大字中爪　内田佐重郎

拜啓貴君は最早某學校を退校致され候由夫れ今日の時勢たる學問を勵み而後家業に專らなるべしとは貴君の平生口にせられし處に御座候然るに貴君は中途にして退學し剩へ退校の後は徒らゐ四五歳の小兒と共ヨリ近隣ヨリ遊び戯らるゝ由想ふに亦両親にも誘慢成され間敷儀と存しゐ就ては再ひ誘入校の上尚深く誘勉學相成度申上候古人も善を責むるは朋友ゝ道なりと申置れたれゝ敢て言ふ顧首

## ◉菊見ニ友ヲ誘フ文

川越高等小學校第二年級生　野田新一

拜啓秋爽日ニ増シ寥々敷御座候處貴君益々御勉學之由奉賀候扨テ三芳野神社境内ノ造菊本年ハ別ノ手際好ク出來致シ殊ニ珍シキ種類モ數多有之候由學友両三輩ヲ語ラヘ既ニ同行相約シ置候處幸ヒ明日ハ休業ニ付散歩旁御遊覽如何枉ゲテ御同意ヲ下候ヘバ幸甚幸甚乍略儀以端書申上候陳ゝ其后ゝ絶へて御無沙汰に打過候處足下にゝ過般の試驗にて無滯



工業學科御卒業被成殊に御優等の由是平素御勉強の功に依る事と奉深賀候降て迂生儀一別以來無事勉學罷在候間乍他事御放念可ヲ下候偖て當地方米作之儀本年ゝ昨年に引換へ殊の外實のりよく村々擧て喜居候ヨリ付是又御休神可ヲ下候兼て申上置候通り一度出京之上緩々御咄し申度と日夜思居候得共農事繁忙之折柄難出拔遂ヨリ上京致しかね久しく面語するを得ヲ遺憾の至りに存候乍去來月上旬にゝ無相違出京貴寓ヲ訪問可仕候間皆〳〵樣へ然可御傳聲相成度候先ゝ用事而已書余ゝ面謁之節可申述候頓首

## ◉他鄕ニ有ル父ヲ待ツノ狀

比企郡福田村　栗本ショウ

妾ガ慈父遠ク東京ニアリ屢報信ヲ得テ其動靜ヲ知ルト雖モ雨露風波ノ夕想ヒニ堪ヘサルモノアリ是レ子トシテ親ヲ思フノ情況ヤ親トシテ子ヲ想フノ意尚深ラン

評　所謂情楮

## ◉馬を吊ふ文

北埼玉郡持田村　小宮喜一

玆に明治二十四年七月聊か薄奠を以て汝が靈を祭る嗚呼痛しき哉汝、汝は幸に生れて不

幸に死したるものと云ふ可し其生るゝや食とする所ハ天の賜、家とする所ハ蒸々たる穹窿、寢とする所は漠々たる大塊、一も人爲の物を受けす故ニ其志や不羈倜儻走らんと欲して走り停らんと欲して停り嚙まんとすれ心嚙み事一に汝の意に任せざるなし實ニ汝は獨立の一個人たりしなり野蠻の民よりも優る遠く半開の民よりも優る万々」然るに一朝出てゝ人に飼養せらるゝや食住皆人爲より成る故に之に報せざるべからぎ是に於てか迅雷烈風の夕と雖も大寒酷熱の日と雖も日夜孜々として其職に從事し惟れ日も足らす己むを得ざるのみ」然りと雖も吾の汝を悼む所以の者は汝の不幸にして貴公子の家に飼れすして吾の家に畜れたるを哀む吾家素より貧故に朝夕其食ふ所は只糟糠のミ其居る所は只雨露を防ぐに足るのみ嗚呼痛しき哉汝」然りと雖も汝試に思へ彼の高帽鮮衣金鞭銀鞍の貴公子に侍したる者を身は暖く食に飽くも終日安逸職とする所なく只ニ外貌を裝ひ生きて國に益なく死して國家に益あり只食を貪りて之に報するを知らず所謂生れざるに如かざるなり見よ蚊蚋の徒すら讀書し既に疲るゝの時人を攪起去て勉免しむるに非ぎや然るに只



其粟を食ふて其職を盡さゞる獨り心に愧ぢざらむや汝幸に生れて不幸に糟糠ニ死すと雖も生きて國益をなし能く其義務を盡して至れり盡せり俯仰又天地に愧づるなし又猥に彼徒と比すべけんや尙くは勉けよ

評　變幻之文諷世之筆

## ◎友人の徴兵に出るを送る文

幡羅高等小學卒業生　吉田源三

一書拜呈仕候承れハ貴兄今年徴兵御適齢にて體格御檢査も相濟み來る何日愈東京鎭臺へ御入營の由奉欣賀候小生中ハ迄も無之我國は古より万世一系の皇統を仰き奉り一二逆賊あるとと雖も覬覦を其間ニ挾み候事無之殊に神功皇后の三韓征伐の如き國威を海外に轟かし彼髯奴輩をして心落ち氣縮み可畏哉日本と驚嘆せし免し事ハ御座候然るに近來歐米各國虎狼の慾を恣にし動もすれば我國に侵害を爲さんと日夜四邊に徘徊致し居候此時ハ當ニ能く國威を未崩に防き國体を万世に安んずるハ兵士を措いて他に良策無之と存候就てハ貴兄御入營の上ハ國家の爲め精々御盡力若一且外夷の我國威を傷け或は人寇致し候節

は身命を犧牲にし勇猛奮擊一歩も退かす確乎さる心氣を皷舞し一擊れ下に彼の碧眼朱髯をして落胆沮喪せしめ我日本固有の大和魂の美光を海外に輝し虎英狼露をして永く痕を收めしめ以て上は聖文武なる　皇帝陛下の辰襟を安んし奉り下は我々同胞四千万の諸民をして天下太平國家萬歳を勸呼せしむる樣心掛け尊一ゑ願上候古人も志士の世に在る寧ろ蘭桂とあり砕るも薫介となりて全きを恥つと申されたり是等の事固より貴兄の厭く迄御承知の儀に候得共友誼上聊か老婆心申進候匆々九拜

評　議論正確筆鋒鋭利合于題意敬服々々



# 亭景畫　老翁節　首雲暮　心鵜峯

## 讀法

長亭短景無人畫　大老横曳細竹筇
回首斷雲斜日暮　曲江倒蘸小山峯

（解）亭ノ字ヲ長クシテ長亭ト讀ミ景ノ字ヲ短クシテ短景ト讀ミ畫ノ字ノ人ヲ無シテ無人畫トシ第二句以下亦同シ乃チ老ノ字ヲ大クシテ大老ト讀ミ雲ノ字ヲ斷リ〳〵ニ書シ斷雲トシ峯ノ字ノ山ヲ小クシテ小山峯ト讀ムカ如シ

此詩ハ日本人ノ唐人ノ作ニ倣フテ作リシモノヽ由ナレトモ唐人ノ作ニ勝サルトカヤ

# 人口膾炙詩歌

詩歌は己か心情を言ひ現はす方便にして只我國人の我國語もて言ひ顯はすを和歌と云ひ支那字にて感情と言ひ現わす術を詩と云へるのみ而して詩歌共に種々なる區別あり今其區別に從ひ人口に膾炙せるものを記さむ其意義に至りては敎師先生に問ふへし

## ○和歌

八雲起つ出雲八重垣つまごめよ八重垣造る其八重垣を

素盞嗚尊

難波津に咲くや此花冬籠り今を春邊と咲くや此花

王仁

高き屋に登りて見れい烟立つ民のかまどは賑ひにけり

仁德天皇

さして行く笠置の山を出しより天か下には隱れ家もなし

後醍醐天皇

いかゐせん頼むかけとて立寄れはあはぬらす松の下露

藤原房

吹風を勿來の關と思へとも道もせにちる山櫻花

源義家

歸らしと豫て思ひは梓弓なき數に入る名をそ止むる

柿正行

かゝるときさこそ命の惜からめ豫てなき身と思ひ捨ねば

太田道灌

急かそは濕れまゝものを旅人のあとより晴るゝ野路の村雨

仝人

人は皆さしいつるころよかりけれ軍の時も魁をして

豐臣秀吉

なからへて花を待つへき身ならねとあは惜まるゝ歳の暮かな

大石良雄

憂きことは尙其上に積れかし限りある身の心たのしに

熊澤蕃山

敷島の日本心を人問はゞ朝日に香ふ山櫻花　本居宣長

## 人面獸心

是はしも人にやあると能く見れはあらぬ獸の人の皮着る　平田篤胤

見れはたゞなんの苦もなき水鳥の足にひまなき我思ひかな　源光國

敵あふはいてものみせん武士の彌生半のねむりさましに　源齋昭

比叡の山見おろす方はあはれなり今日九重に烟りかざして　浦生君平

我を人としろしめすかや皇の玉の御聲のかしゝる嬉しさ　高山正之

親もなし妻もなし子なし板木なし金もなけれと死たくもなし　林子平

研き得て國の寶となるものゝ人の心の玉にそありける　僧月照

身はさとひ武藏の野邊に朽るとも留置まし日本魂　吉田松陰

## ○今樣

花より明るみよし野の春の曙見せたふはたゞ唐土人も高麗人も日本心になりぬ



べし　頼山陽

## 仝

皇御國の武士は如何なる事をか勉むへき只身にもてる赤心を君と親とにつくすまて　加藤司書

## ○發句

古池や蛙飛込む水の音　芭蕉

雪の朝二の字〳〵の下駄の跡　西山宗因

啼くにさへ笑ふ如何に郭公　杉木みつ

大晦日定めなき世のさゞめかな　井原西鶴

どう見ても雲はと黑きものはなし　齋藤德元

公の二みは貧しき中にあり梅の花　左甚五郎

きッとしゝ男給事や初堅魚　天野屋利兵衛

山を拔く力も折れて松の雪　大高子葉

（注意）子葉ハ忠臣藏ニ云フ大高源吾ニシテ主ノ仇ヲ復サンカ爲ニ艱難辛苦東西ニ奔走スルノ暇俳諧師其角ニ學ヒ業大ニ進メリ此句ハ源吾煤竹賣トナリ敵情ヲ探リ愈々今夜仇討ト決心シ歸ルノ道不圖其角翁ニ遭ヒ示シタルモノナリ

夕立や田をみめぐりの神ならば　榎本其角

浦團着て寢たる姿や東山　環嵐雪

梅一輪一輪ほどのあゝかさ　仝　人

錦着て疊の上の乞食哉　市川半平

梅の花赤いは赤い赤い花　惟然坊

夏い又冬か優しやとゞしけり　伊丹鬼貫

是は〳〵とはかり花の吉野山　芭蕉翁

初雁やなゝべて聲い惜いもの　加賀千代



一ト抱へあれと柳い柳かる　仝　人

## 詩

### 醉餘口號

四十年前少壯ノ時　功名聊亦自私一期ス　老來不レ知干戈事　笑把春風桃李ノ巵　伊達政宗

花時遊大原訪豐臣長嘯子

君是護レ花花護レ君　有レ花此地久留レ君　入レ門先問花無レ恙　莫レ道先レ花更後レ君　藤原惺窩

賜足利義政

殘民爭採首陽薇　處々開レ爐鎖二竹扉一　詩興寒酸春二月　滿城紅綠爲レ誰肥　後花園天皇

戊子夏與諸生觀月

清風滿座忘二炎暑一　明月當レ天絶二世塵一　同志偶然乘レ興處　不レ知不レ識帝堯民　中江藤樹

九月十日（作十三日　一作十五日）　菅原道眞

去年今夜持ㇾ清涼　秋思詩篇獨斷腸　恩賜御衣尙在ㇾ此　捧持每日拜ニ餘香一

## 九月十三夜能州作　上杉謙信

霜滿ニ陣營一秋氣清　數行過雁月三更　越山併ㇾ得能州景　遮莫家鄕念ニ遠征一

## 秋感　鍋島齋正

八州風雲衝ㇾ天勁　手握海內兵馬柄　悲歌一曲吊者誰　鎭西男子藤齋正

## 冬日陪於飛香舍聽皇子始讀孝經應教　源俊賢

珠ハ待ニ琢磨一金待ㇾ鍊　人情從ㇾ教亦如斯　我王問ㇾ道偏依ㇾ禮　至孝自然生ㇾ即知

## 弘道館賞梅花　水戸景山公

弘道館中一樹梅　淸香馥郁十分開　好文豈是無ニ威武一　雪裡占ㇾ春天下魁

## 富士山　石川丈山

仙客來遊雲外嶺　神龍栖ニ老ㇾ洞中淵　雪如ニ紈素一烟如ㇾ柄　白扇倒懸東海天

## 上杉謙信　賴山陽



鞭聲肅々夜過ㇾ河　曉見千兵擁ニ大牙一　遺恨十年磨ニ一劒一　流星光底逸ニ長蛇一

## 題長安主人壁　張謂

世人結ㇾ交須ニ黃金一　黃金不ㇾ多交不ㇾ深　縱令然諾暫相許　終是悠々行路ノ人

## 貧交行　陶淵明

翻ㇾ手作ㇾ雲覆ㇾ手雨　紛々輕薄何須ㇾ數　君不ㇾ見管鮑貧時ノ交　此道今人棄如ㇾ土

○

青年重ㇾ不ㇾ來　一日再ㇾ難ㇾ晨　及ㇾ時應ニ勉勵一　歲月不ㇾ待ㇾ人　朱文公

## 無題

少年易ㇾ老學難ㇾ成　一寸光陰不ㇾ可ㇾ輕　未ㇾ覺池塘春草ノ夢　階前ノ梧葉已ニ秋聲

## 海南行　細川頼之

人生五十愧ㇾ無ㇾ功　花木春過ㇾ夏已ニ中ス　滿室ノ蒼蠅掃難ㇾ去　起尋ニ禪榻一臥ニ淸風一

## 勸學篇　宋眞宗皇帝

富レ家不レ用レ買二良田一　書中自有二千鍾粟一　安レ居不レ用レ架二高堂一　書中自有二黄金屋一
出レ門莫レ恨レ無二人隨一　書中車馬多如レ簇　男兒欲レ遂二平生志一　六經勤向二窓前一讀

題壁　僧清狂

男子立レ志出二鄉關一　學若無レ成死不レ還　埋レ骨豈期墳墓ノ地　人間到處有二青山一

失題　作者不知

才子恃レ才愚守レ愚　青年才子不レ若レ愚　請看"他日功成ノ日　才子不レ才愚不レ愚

## 新體詩歌

### ○偶成

わが年少き同胞よ　朝な夕なの戒に　大和唐國西洋の
國の開化の本末や　世にも名高き人人の　歴史を繙きながめみよ
惠みも深き神洲の　榮ゆる明治の御代とても　誇り貌なる西洋の



文明とても是ぞこれ　幾世の人の幾滴　汗をしぼりし仕事なり
我日の本の名も高き　正成朝臣なるものは　彼れ何者ぞ其初め
金剛山の麓なる　河内の國の山里に　鋤とる男子左はなきや
昔唐國孔夫子　孟子曹參韓文公　或は西土のジョンソンや
ゴールドスメス。ニエトンの　名を擧げ譽を殘せしは　抑や如何なる所以なるぞ
凡そ是等の人々の　世に稱られる他に越て　秀れし人と成る元は
難き事とて屈せそに　安き事とて安せそ　心を込めて成せしなり
彼も人なり吾も又　同じ天下の人なれば　彼は秀ぐし人なれば
吾も劣りし人ならト　彼勝れ得て吾一人　劣るは心のさらぬなり
春は花咲く梅櫻　もとをさゝせは芽生なり　積る深雪にさもまずに
吹く荒風に根をかため　霜に屈せず露を吸ひ　一と歳毎に老ひしなり
わが年少き同胞よ　今は同じくめゝれなり　左ゝさりながら後にぞろ

學びの道を開かんか　博士の譽を流さんか
雪の光りに文を讀み　霜の寒む夜に書を習ひ
學びの庭に通路の　絶ねは何時か冬過きて　梅や櫻と同じとなり

○奬勵

塵も積れば早晩に　天雲棚びく山となり　嵐吹く日も雨の夜も
終には千尋の海と入る　卑流れて止まざれば　春や我身に花咲かん

其二

人の爲すべきその業は　種々樣々に異れども　日々に勉めて休まざれば
何かは成ざることあらん

其三

をしめや惜め光陰を　今年今月今日い　生涯まだ一日ぞ
月日い環り來るとても　かあじ月日は歸りこを　惜し光やをしめ光陰を



今年今月今日は　生涯まだ一日ぞ

其四

まなべや學べ一藝を　今は學術おほくして　千歲まなぶも飽さらず
人間わづか五十年　何とて餘間の有るべきや　こゝろを諸藝に分ちては
一も得ること無るべし　學べや學べ一藝を

其五

富をねがはゝ一身に　わが學業を勵むべし　金殿玉樓輪奐と
七珍萬寶充滿し　いづれば駟馬の車馬に乘り　かへれば錦の席に座す
渾てこゝろに思ふこと　一も叶はぬ事あらじ

其六

すゝめや進めいざすゝめ　筆のうち物机のたて　時計の陣鐘ひゞくまで

手剛き問題きり開き　卒業証書のぶん取を
とり得て歸る働きい　これぞ生徒の手柄なる

○世渡の海

よくも出來さり實りたり　往來の人も稻の並
見をい農はとよき業は　又とあらしあ國本も
笑にかゝると聞くからに　劒を賣て鍬を買ひ
腕もかんなも脫けそうに　そをのみあらと霖雨や
夜の目も寢すに引板の番　さるに一日野も山も
泣くにもなけず取分けて　世の常なきを唱より
嗚呼六かしの世渡や　賤しといへと今の世い
物賣るわさは昔ころ　あふしと聞けは失も楯も
もとむる道はこの外は　國の光と身の幸を
はやゝまらしと投け捨て、

第一番にこゝろがけ

わけて今年の秋穫を
こゝに基ひし民命も
もそき返しても長き日の
旱よ水のかけ引や
野分の風の無慘やな
外に詮術なかりけり



輸出輸入の平均や　彼れに得られし商機を
胸算用の正鴻は　あへなく外れ慢幕の
賣れは借られて買ひは損　杖と頼みし元も子も
あらしの庭の花紅葉　世の常なきを唱つよと
嗚呼六かしの世渡や　此處の泊や彼處の濱
棹一本に浮々と　危險を怯も恐れたに
舟子も暴風の危險あり　取もとさんと健氣なる
日頃の技倆顯はすは　設け處か呼もなく
よし求むとも其藝も　消て果敢ゝき雲霞
誘ふ人なき身の不運　外に詮術なかりけり
流るゝ氷を友として　遊ひのてらよ渡らるゝ
嗚呼六かしの世渡や　譽の海に乘り出し
いと易けれと夫とても　よるへき藝をもとめねば
共に根はなき浮草の　憂き艱難をよそに見て
はり裂く胸を押鎭め　月に嘯き花に醉ひ
世の常なきを唱つより　他に詮術なかりけり

世渡る業は多けれと　彼よ利あれゝ此に害
畔を走るも田を飛も　同し羽色の蝶鳥は
其生活は習ふより　慣し手業を怠らに
明日は今日より明後日は　又明日よりと工夫して
其熟練と遺傳とに　光りを加へ漸くゝ
我を知ふにゝ一日より　一日と樂に側目より
嗚呼いと易の世渡や　つきて廻るは諺の
おろかな事よ小虫さふ　傍目をふふに一すふに
祖先の立てし訓誡と　勵み進めはおのつかふ
羨む聲を聞く時は

# 脩身科

## ○蟻と蟋蟀



蟋蟀　寒中に至り寒さと飢ドさに堪へに夏の中より多く貯へありと評判ある蟻の巣に行き平身低頭して

蟻殿よ　蟻殿よ　誠にお無心ですか　私は冬か來て食物に困りましさかふ　情願か彼方のお貯を少し　施して下さい

といへは蟻は蟋蟀に向ひ

お前さんは夏の内　何をして日を暮しなさいました　ナぜ食物を貯へて冬の用意をなさらないのです

と問へは蟋蟀はなさまを掻き

私はッィ夏のうち　遊んてばかり居て冬の來るのを忘れて居りました

蟻ハ點頭て

私ハお前さんのようよ夏の中遊て居ち力の續く限り働いて冬の用意をして置ましたから冬に成ても　飢くもありません　お前さんは夏の中遊んでばかり居さから

今お困り成さるのでは夫は自業自得ぞです

とて彼の「遠き慮りなきものは必す近き憂ひあり」の意を説きたりとなん

## ○孝子の下駄

或學校の生徒に學徳優等品行端正おして最も親孝行の名あるものありける一日下駄と草履と片足つゝ穿ちて登校しけれは見るもの大よ笑ひり　然とも教師は此生徒の平常を知れるものから必らす故よそおふめと　乃ち何故に下駄と草履とと片足つゝ履き來りやを問ひり生徒曰く

、今朝將に家を出てんとす母の曰く雨後よて道悪からん下駄を履け　父の曰く天既に晴る草履よて可しと乃ち草履よせんか母の命に反く下駄を穿んか父の命を奈何　依て下駄と草履と片足つゝを穿ち以て父母の命に反かさるを期せりと

論語に曰く勞しく怨みは敬して逆はそと人の子とるもの此孝子の心掛なかるへからは

## ○太陽と長安の遠近



晋の明帝は幼より聰明なりしかは父元帝殊に之を寵愛し賜ひけり其齢五六歳の時長安よりの使者到りけれゝ元帝試に太陽と長安といつれか遠きやと問はるゝに明帝對へて長安近し何となれは人の長安より來りし者あるを聞かすと元帝大に喜び翌日群僚を召し酒宴を催され復た明帝に長安と太陽と遠近と問いる　然るに此度は前言に反し太陽近しと答へられけれは元帝大に驚き何そ昨日に異るのはなはたしきやと明帝曰く今頭を仰けゝ太陽と見れとも長安を見そと元帝益々之を奇とせらるしか後遂に英明の天子とならせ給へり

## 頓智

## ○車夫の頓智

痩せ形にして眼鋭く一寸見た所で神經質の旅人に向ひ

車夫「且那ハ都合まで俥安く參りましよう

と乘車を勧めたるは少しも文字は知らざる深谷町寄留毎日かせぐといふ人力車挽です

此車挽は文字こそ讀ねど頓智々々大頓智よして旅人を乘せ道々も世間話をしなから並木

より中山道を挽て熊谷まで來ましたヤガテ有名なる熊谷寺の門前に通り掛る旅人は何か

頻りよ頷く樣子なりしが熊谷を出て丶久下の堤に掛ると旅人ハ車夫よ向ひ

旅人「字といふ者は妙な者ぞナアー　熊谷寺と書て熊谷寺と讀むナアー

と云ひけれバ車夫ハ固より無學文盲にして文字のゆゑれは知らざれとも聽て考ひ出して

車夫「左樣ですよ其ハ丁度鴻巣寺と書て勝願寺と讀むやうな譯で

と答ひましたから神經質の旅人は此答の爲には餘程神經を煩はしました

旅人「なよ鴻巣寺と書て勝願寺……ハテ變ナ字もある者だナアー鴻巣寺と書て勝願寺

と頻りに考ひましたか迚も鴻巣寺と書て勝願寺と讀むべき文字は考ひられませんソコデ



旅人は車夫に問ひました

旅人「其ハマアーどんな字を書くのです

と問はれて車夫は大よハり前にも言ふ通り車夫と無學です文盲なのです只熊谷て有名な

る寺は熊谷寺ぞすから熊谷寺と書て熊谷寺と讀み鴻巣で有名なる者は勝願寺ぞすから鴻

巣寺と書て勝願寺と讀むと思ッたゞけです然るに今其れはマアー　どんな字を書のぞす

と問はれて車夫は大よ困りました　スルト

旅人「其れハ何扁でしよう

と聞きましたから車夫ハぬからぬ顔で

車夫「慥か足立邊てす　旅人「足立扁　足立扁妙な扁もある者たナアー　シテ造りハ

車夫「大根　胡蘿蔔　芋　蕪

蓋し車夫は文字の扁や　造の事にも氣が付かず只鴻巣ハ足立郡に在りて大根、胡蘿蔔、芋、

蕪、等の作物あるを以て斯くは答へたるなり嗚呼車夫の心たる天下を愚弄して頓智々々

## ○十露盤割出し話

處は慥か高麗郡飯能町でした算法の達人とゆす人がありました　此人十露盤の道に長け大抵の事い十露盤で取り極めましさ飯能の傍さ八幡の森かゆ座りまそる此森さ今ではありませんが其頃諸方に　俳徊せる六部の一人の休んで居ました　處へ甲吉　乙藏といふ二人の者か通りかゝりましさ二人ともに六部を見て　甲吉「ヲイ彼は贋六部させ　といひ　乙藏は否彼は本當の六部ざ　と此に甲吉と乙藏のいひ爭を生ト果い抓み合ともならんとせしが忽ち二人ともよ氣を取り直し兎も角も飯能の達人先生に聞て見ましようとて連て両人とも先生の宅に出て爭への摸樣を話し其六部い贋か眞の判斷を願ひますと頼みました　スルと先生は威儀を正し十露盤を持出し両人に向ひ

先生「何らに致せ六部にい相違ありませんか

両人「身態い六部に相違ありません



先生「そんなら一旦い六部即ち一段六歩と置て見ましようシテやせて居ましさか又太ッて居ましたか

両人「左樣世れ不景氣に伴を蛍か鮮ひかして瘠切ッて見ましさ

先生「然らい八畝(瘠)減て見やう　とて一段六歩の内から八畝減ましさスルと殘りか二畝六歩と出て　人々ハハァー是は贋六部ダ

## 記事文

記事文ニ就キ注意スヘキ事柄ハ少ラスト雖先ツ其記述スヘキ事實ヲ十分ニ勸察スル事最以テ大切ニシ或ハ詳ニ筆スヘキモノアラン或ハ簡略ニシテ省クヘキモノアラン或ハ專ラ其効用ヲ擧ケ或ハ專ラ其特性ヲ述ヘ或ハ專ラ其事歴ヲ記シ或ハ專ラ其部分

ヲ說ク等其記述スヘキ事實ニヨリ同一ナルヲ得ス然正記事文ノ体裁ハ庶物記事　談話体及ヒ論說文等ニ過キス

## 庶物記事文

ニハ名稱　種類　區別　功用等ノ点ニ注意シ第一　其物ノ他ノ同種ノ者ト同一ナル所第二　其物ノ他ノ物ト異ル所　第三　其物ノ特別ナル性質形体若クハ効用　ヲ記スヘキナリ即チ左ニ「馬」ノ例ヲ示ス他ハ類推スヘシ

例

(一) 馬ハ哺乳獸ナリ

(二) 馬ハ草食獸ナリ

以上他獸ト同一ナル所

(三) 馬ハ單蹄獸ナリ

(四) 馬ハ家畜ニテ車ヲ挽キ人ヲ乘セ田ヲ耕ス



同シ草食獸中他ノ種類ト異ル所

(五) 馬ハ柔順ナリ

(六) 馬ハカシコキ獸ナリ

以上特別ノ性質

右ニ擧クル所ヲ主トシテ記事文トナセハ

馬ハ哺乳動物中草食獸ニ屬シ其蹄一個ナリ故ニ單蹄獸ト名ケ家ニ畜フテ人ヲ乘セ車ヲ挽キ田ヲ耕サシムルノ用ニ供シ性質柔順ニシテカシコシ

此例ニ因リ左ノ練習題ヲ自作スヘシ

動物篇　雞　兎

植物篇　梅　松　茶

礦物篇　金　石　炭

天地篇　地球　東京　雨

制度篇　學校　貨幣　紙　時計

人事篇　和氣清麿　三奇士　仙臺萩　義經千本櫻

精英舍活版所印行

# 少年文叢

## 將來ノ少年

埼玉縣北足立郡
瓦葺村卅九番地　家里次郎

爛熳タル櫻花峨々タル富岳是レ我神州ノ特有ナリ而ノ此愉快ナル邦土ヲ讓リ受クル者ハ誰ゾ即チ將來ノ少年也嗚呼多幸ナル將來ノ少年ヨ嗚呼多福ナル將來ノ少年ヨ然リト雖眼ヲ放テ四境ヲ望メハ英獅ハ浜ヲ蹴テ東洋ヲ縱亂シ魯鯊ハ大陸ヲ踏亂ノ正ニ我神州ニ向ハントス其危キコト恰モ劍上ヲ歩ムカ如シ嗚呼將來ノ少年ヨ若シ此英獅魯鯊ノ我ニ迫ラントスルアラバ一歩モ撓マズ日本ノ旭旗ヲ富岳上ニ樹テ剛毅不抜ノ鎗劍ヲ以テ彼等ノ眼前ニ閃カシ以テ彼等ヲシテ亦我邊境ヲ窺ハシムル勿ラシムヘシ果シテ然ラハ記憶セヨ將來ノ少年ハ多幸ナリト雖四境ヲ見レハ危難ナリ故ニ將來ノ少年ハ此危難ナル毒物ヲ退治シテ以テ爛熳タル櫻花香發シテ以テ宇内ヲ烟滅シテ万民鼓腹太平ヲ歌フニ至ラシメヨ

評曰　有秩序有氣拔

建武乃昔正成は。肌の守を取出し。是ハ一歳都攻の有し時。下し給ひし綸旨なり。是を汝に與ぬるなり。予か兎に角ゝなるならば。世ハ尊氏の世となりて。叡慮を惱し奉らんハ。鏡ゝのけて見る如し。さハ去なから正行よ。父の子ならハ流石にも忠義の道ハ兼てゝ。弓張月の影暗く。家名を汚すことなかれ。打洩らされし涙黨を。あとれみ扶助し。隱家の。吉野の山の奥深く。月の桂ハ漣や流も清き菊水の。旗を再び飜へし。敵を千里ゝ追のけて。叡慮を安んし奉れ。嗚呼叡慮を安んし奉れ

## ○○貧富ハ人ノ勤怠ニ因ル

松山高等小學校生徒　内山桂麿

熟ラ世界万國ノ狀態ヲ考フルニ漸々開明ノ度ヲ進ムルニ從ヒ人口モ亦增加シ來リ今日ニ至テハ其數十有余億ヲ以テ算スルニ至レリ而シテ貴賤貧富生態各同シカラス其富貴ナル者ハ身ニハ美服ヲ纏ヒ口ニハ膏物ニ飽キ出ヅルニ駟馬アリ入ルニ從者侍人アリ米倉ニハ鉅橋ノ粟ヲ積ミ金庫ニハ陶朱猗頓ノ財ヲ充テ其貧賤ナルモノニ於テハ住スルニ家無ク食スルニ粟無ク人家ニ立チテ一掬ノ食ヲ乞ヒ以テ其身ヲ全フスルアリ其甚シキニ至テハ饑餓凍凌交モ至リ道路ニ斃死スルニ至ル嗚呼何ソ其此ノ如ク差アルヤ夫レ貧富ハ天禀ニノ人ノ能ク之ヲ動カス能ハサルカ否然ラス王侯相將焉ソ種アラン故ニ貧者モ拮据勵精ノ勞働スレハ豪家トナリ富豪モ徒ニ光陰ヲ費シ勞働セサレハ貧賤トナルヤ必セリ古諺ニモ坐ノ食スレハ山モ虛シト故ニ人ト生レ苟モ富貴安樂ヲ願フ者ハ勉强勞苦成ス可キナリ然ルニ方今ノ時勢ヲ見ルニ皆怠惰安逸ニ耽リ徒ニ富貴ヲ願望スル者滔々タル天下皆之ナリ何ソ思ハザルノ甚シキヤ

評曰　貧富ヲ景樣スル所一喜一憂

## ◎不倒翁ノ説

大里郡江南學校温習生　小島滝藏

不倒翁ハ赤キ衣ヲ着シ其眼光爍々トシテ人ヲ射リ無手無足ニシテ只倒レザルヲ以テ德トス故ヲ以テ人之ヲ尊ンテ愛スルモノ多シ余之ヲ聞其昔天竺ニ達磨ナルモノアリ面壁三年以テ坐禪ヲ修メタルヲ後人像トリテ此翁ヲ作ルト抑モ此世ニアリテ事ヲナスニ當リ第一尊ムベキノ德ハ倒レサルニアルベシ若シ夫レ一事ヲナサントスルニ當リテ中途ニシテ挫折セバ決シテ成業ノ期ナカルベシ然ルニ三年ノ辛苦ヲ事トモセス終ニ修シ終リタルハ豈忍耐强クシテ不撓ノ精神アルモノト云ハザルベケンヤ宜ナリ後人其像ヲ尊崇スルコヤ故ニ余モ此翁ヲ以テ座右ノ戒トナシ此説ヲ作ル。

評曰　不徒作

## ◎驕慢戒ムベシ

南埼玉郡谷下　小澤龜吉

今夫レ宇宙間ニ生息スル人類トシテ貧富貴賤ヲ論セズ誰カ一生ノ目的アラサル者アラン



然ルニ古今ヲ通シ能ク目的ヲ貫徹シ宇内ニ功名ヲ擧ゲシ者果シテ幾人カアル誠ニ慨歎ノ至リナラズヤ是畢竟驕慢心ニ因ル也實ニ此驕慢ノ二字ハ人ノ最忌ミ厭フ所ニノ人タル者一大事業ヲ成スノ際ニハ如何ナル難ニ遇ヲカヲ知レス此ノ時ニ當テ我識量ノ不足ヲ顧ミス小成ニ驕慢シ孜々トノ其巧ヲ積マサレハ焉ソ僅少ノ事業モ能ク成立スルノ期アランヤ遂ニハ不熟的ト也恰モ大海ニ漂流セル孤舟ト異ナラスノ一朝颶風ノ難ニ遇ヒテ朽ナン豈慎マズハアルベカラス假令天才敏捷ニノ一旦得ル所アリトモ決シテ驕慢者ニ慣フベカラズ

評曰　更ニ一歩ヲ進メサルヲ憾ム古人モ諸侯驕レハ社稷ヲ喪ヒ云々ト云ヘリ我國古史ヲ繙キ藤原ノ惡タル平氏ノ逆タル此是驕慢

高麗郡甲東學校温習生　橋村さく

## ◎春ノ解

春ハ四季ノ始ニシテ温和ナル時ナリ草木ハ嫩芽ヲ發シ桃櫻ハ美麗ナル花ヲ開キ田畠ニハ諸ノ種ヲ蒔ク時候ナリ又人ノ幼年ハ一生中ノ春ナリ故ニ能ク學問ヲ勉强スルハ田畑ヘ種子ヲ蒔クト同シ若シ幼年ノ時怠惰ニ種子ヲ蒔カスシテ壯年ニ至リ後悔シ寒風凜烈ノ候種

子ヲ蒔カント欲スルモ能ハス故ニ老テ後悔セサル樣幼年ノ時ヨリ能ク心掛ケ學問セサル可カラス

評　橋村君此心アリ其結果知ルベシ勉哉焉

## ◎女乃道

幡羅高等小學校生徒　柳澤とよ　小島よし　合作
淺見なは

正しき道を蹈み行くは男女の別は無けれとも女は男より生れ就きの本性か最も柔温しく夫れに連れ取る職業も異りて道理は一つ道二つ手弱き体と精神と知識の程と省みて天の與へし女子の道全ふするぞ女子の德

産聲高く生れ來て二つ三の年を經つ獨り歩きの出來る迄成長すれば早や既に人形其他色々の艶をば愛てゝ漸くは年を重ねて初春の咲くや此花冬おもり何時其覆を去るとか吾人は之を知らねとも誰教ゆるとなく兒童をば世話する樣の愛らしさ人の衣服の樣を見て彼れ是れ云ふのゝ下らしさ喰事茶事食べ物の料理の眞似する事よりも細かき事は一二なく三も四も五も六々に普人なれは七面倒と耻をかくも九痛をは十くりの側の世話までも屆



渡れる其注意女子の生れぞ優しけれ

是れ見て女の一生を渡りて惑ず心得は自然に男子と異れりされは多くの年重ねつぼみも將さに開のんす年に至りし其時は隨分品行端正に谷間を流るゝ岩清水山邊に生ひ立つ青松葉菅原公の愛したる雪にもたゆまぬ寒梅の清き操を破らすに針の仕事や糸を操る其暇には讀み書きも人よ後れを取らぬ樣外に出てゝは吾よりも年の老けたる人々や吾か友とちに親切にさかなき口を聞かすして器量自慢の振舞は中々見惡き者なれは能く心を大切にひかい目なるぞ女子の德

偖て能き縁の橋架けて渡りて一生暮すへき家を得たらは其時と舅姑を生みの父母として孝養をさ〳〵怠らす夫を大事に何事も萬事に拔目なき樣は迚も及はぬ事なれと誠心盡して仕ふるぞ妻たる者の德ぞかし廣き世界のうが中には己れの邪見を棚に置き夫を目下に見下して舅姑を鬼の如くに思ひ孝養とても祿々に顧みさるの女夜叉あり是れ等は身分知らすとて未天罰を蒙るは鏡に掛て見る如し昔し姑をば殺さんと吾夫をは辨能くも說き降しつゝたくらみは既なりつゝ首尾能くも姑をは殺せし事なりと思ひの外吾夫雷に打れ

ぞ死したる因果應報の聞くもうたてき談あり心の曲れる鬼子とち是れ見て心を改めよ扨て又貽せる種子ありて產み落したる吾子をは能く氣を付けて後々にさかしき人ぞとたゝへられ家の爲め又國の爲め大事の事のある時は古忠臣にも劣らさる忠と孝との二つ道欠かぬ樣にぞ養ふか母たる者の本分ぞ

身に卷く帶の廣々と心の程もゆるやかに瑣細の事に逢ふ時は短氣は損の基ぞよと風に柳の長袖や他人につき逢ふ其時は機嫌そこねぬ愛嬌を顏に顯はす優すがた然ればと云ふて心よは國家と思ふ苦志慷慨寢る間も放さぬ其心吾子に移して育てなばさぞや優しき兒や出來んさぞや優しき子や出來ん然るに世間の母達い此理は更よ無我夢中飾りの品となし果つ三遷斷機の道理をば解せぬ事ぞ悲しけれ

北埼玉郡持田村大字持田　小宮喜一

## ◎女子教育論

佛人某氏言ヲアリ曰ク

吾ガ邦賢母に乏シコレ吾邦ノ疵瑕ナリ



ト嗚呼教育ノ普及シタル歐羅巴文化ヲ以テ聞エタル佛人ヲシテ此嘆息ヲ發セシム知ルベシ吾邦女子ノ教育如何ハ

看ヨ看ヨ今日良家ノ子女ト稱スルモノヲ彼等ハ何事ヲ爲シテ以テ此歲月ヲ充シツヽアルカ其十中八九ハ概ヲ粉黛是レ事トシ日ニ管弦絲竹ヲ拈リツヽアルニ非ズヤ吁夫レ何ソ閑ナルヤ知ラスヤ今日ハ亦曩日舊日本ノ今日ニ非ズシテ生存競爭場裡ノ活世界ニ立チツヽアルヿヲ然ノミナラス彼等ノ拈弄スル三弦果シテ嫻雅ニシテ優美壯重高尙以テ其子女ノ德育ヲ涵養スルニ足ルトナスカ否德川氏太平二百有餘載ノ間物各其緒ニ就キタリト雖モ獨リ此三弦ハ其太平ナルカ爲メニ其元來ノ溫柔ニシテ然モ高尙優美ノ性ヲ驅テ益悲境ニ陷ラシメタリ即チ德育ヲ支配スルノ三弦ヲ變シテ淫風淫樂トナシ淫靡ナル事實ヲ敎ヘ風俗ヲ壞亂スルノ原動力ト化セシメンニ非ズヤ、諸君ニソ余ガ言ヲ信セサル者アラハ請フ彼等ノ言フ所ヲ聞ケ實ニ彼等ハ其淫靡ナル聞クニ堪ヘサル言句ヲ其父母ノ面前ニ誦シ父母亦之ヲ聞テ怡トシテ顧ミサルノミナラズ反テ之ヲ榮ノ極ナリトシ是レ見ヨガシニ公衆

ニ誇ルニ非スヤ故ニ之ヲ以テ敎育サレタル子女等平常之ヲ耳ニシ之ヲ目ニスルノ結果之ヲ彼ノ壘リナキ腦裡ニ感染セシメテ終ニハ己レ其主ト人ナリテ之ヲ實演ノ公衆ノ笑ヲ招クニ非スヤ嗚呼彼等素ヨリ之ヲ以テ世ニ立タントスル者ニ非ルベク之ヲ學ヒテ名ヲ竹帛ニ垂レントスルニ非ルベク又之ニ依テ其蘊奥ヲ極メントスルニモ非ルベシ唯之ヲ娯樂ニ供センガ爲メソ一小枝トシテ弄スルニ過ザルベシ然ルヲ世ノ人是レヲ顧ミス此三弦ノ爲メニ貴重ナル長年月ヲ費シ其女子ノ本分タル女子トノ欠クベカラザル家事經濟法裁縫術調理法育兒法ノ如キハ之ヲ度外視ノ顧ミス之ヲ以テ日本ノ女子ト稱スル者多クハ無智短才ニシテ夫ヲ助ケテ家ヲ治ムルニ足ラス又其子ヲ敎育スルニ於テ完全ナルヿヲ得ス隨テ偉人ヲ生ゼシムルヲ得サルハ理ノ昭々タル者ナリ彼等幸ニシテ良家ニ生ル此良家ノ子女亦衣食ニ齷齪スル者ニ非スヨシ良家ニ嫁テ辛フノ世ヲ渡ルト雖モ此煩雜ナル競爭場裡ニ立ツ能ハサル者ナリ然ノミナラス良家ハ將來ニ於テノ學士博士ノ胚胎所ナリ此ノ無敎育ノ子女如何ナル敎育ヲ施ノ最良ノ學士最良ノ博士ヲ出スヿヲ得ルカヲヤンバーレーン氏言ハズヤ曰ク

日本文學者ニ「ジニアス」ナシ何ヲ以テ斯ク言フヤ曰ク一世ヲ動シ未來ヲ支配スル程ノ大文學者アルヲ見ズ彼ノ「セークスピーアノ如ク」「ゲーテー」ノ如キ者今ニ至ルマデ日本ニ出デズ紫式部曲亭馬琴ノ如キスグレタル文學者相違ナキモ未ダ以テ「ジニアス」ノ尊稱ヲ許スベカラズト

吁此言不可トスベカラズ源氏物語八犬傳日本文學ヲ代表スルニ足ルト雖モシエークスピアー ゲーテー シルレルニ優レリト言フベカラズ理學界ニ於テ未ダガリレオ フランクリン ケプレル ニユートンヲ見ズ哲學界ニカント ヘーゲルアルヲ聞カズ嗚呼我等ハ過去ニ「ジニアス」ヲ見ル能ハズ文學界哲學界ニ於テジニアスヲ生ズルハ將來ニアリ將來ニ於テジニアスヲ見ントト欲スト雖モ其母タリ保姥タル者不學無術ニシテ其子女ヲ敎育スル能ハザルニ於テハ如何ゾジニアスヲ生スルヲ得ン嗚呼女子ノ敎育忽ニスベカラザルナリ世ノ父兄タル者眼ヲ此ニ注ギ其女ヲ敎育スルニ於テハ宜ニ日本ノ幸ノミナラス亦世界

ノ幸ナリ余素ト教育者ニ非スト雖モ近來女子ノ教育ヲ見テ聊カ感スル所アリテ女子教育論ヲ作ル時ニ四顧闃然万籟寂トシテ聲ナク唯孤雁ノ一聲高ク月ニ叫フヲ聞クノミ

評曰　文勢如貫珠結文一句極感慨反切之情

◎學問ノ成否ハ貧富ニ依ラスシテ志操ノ厚薄ニアリ

在群馬赤岩　飯島　寂猛

學問ノ成否ハ貧富ニ依ラスシテ志操ノ厚薄ニアリ庶鉅萬ナリト雖モ學問ノ眞理ヲ闡發シ社會ニ立チテ鴻益ヲ起スヿ能ハザルハ吾人ガ通常豪家ニ徵シテ歴々目擊スル處ナリ夫レ然リ而シテ方今青年諸子ガ言フ所ヲ聞クニ毎ニ言ヲ資金ノ乏シキニ籍リ曰ク我韓柳ノ筆華盛頓ノ事業ヲ欽慕スレモ資力ノ以テ學資ニ供スルナキヲ奈何セン若シ十萬ノ金匱アラバ英米各國地球ノ東西ヲ縱覽シ世界ノ智識ヲ方寸ニ收メ坐シテ以テ一世ヲ風靡スベシト是レ眞ニ無氣力者ノ通言ニシテ卑屈是ニ安ズル者ノ言ナリ



西人曰ヘルヿアリ勤勵ナル人ハ進ンデ難事ト戰フ故ニ其心膽ヲ剛勇ニシ遂ニ之ヲ征服ス怠惰ナル人ハ勞苦危險ノ光影ヲ見テ震慄退縮ス故ニ其ノ恐懼ノ心ニ由リ事ヲナスヿ能ハズト善哉言ヤ夫レ學問ナリ事業ナリ自カラ期スル所ノ目的ヲ達スルニハ其間必ズ多少困難艱苦ノ前途ヲ遮ルアリテ針路ノ障碍ヲ試ムベシ此ノ時ニ當リテ勇往直進志操ヲ鋏石ノ堅キニ持シ勉焉以テ艱難ヲ排除シ奮フテ平垣ノ地位ニ達スルハ耐忍ノ効ニシテ彼ノ黄金ノ力モ之ニ克撃スル能ワザルナリ否克撃スル能ハサルノミナラズ却テ志氣阻喪身体羸弱ノ媒介タル具トナルヿアリ何トナレバ金力ニ富ム青年子弟ノ行爲ヲ見ルニ概シテ之ヲ云ヘバ麗衣鮮食其酒ヲ池ニシ其肉ヲ林ニシ春花秋月ニ遨遊シテ悶ヲ遣リ鬱ヲ排スト稱シ動モスレバ鎖金帳裡ニ魂魄ヲ消シ情慾ノ海ニ溺レ稟性頴敏ノ人モ道理ノ正路ニ出ル能ハズシテ身体財産ヲ抛棄シテ復タ顧ミザルニ至ルヿアリ豈ニ淺間敷次第ナラズヤ由此觀之少年子弟ニシテ資金ニ餘裕アルハ小兒ニ刃物ヲ與フルト一般ニシテ身体ノ傷痍ヲ招カザルヿ殆ンド稀ナリ

眼ヲ轉シテ古來眞正ノ學問ニ熟達シ遠大ノ事業ヲナシタルモノヲ見ルニ每ニ窮乏ノ者ニ多クシテ富貴ノ者ニ少キモ亦タ偶然ニアラサルナリ窮乏ノ者ハ常ニ衣食ニ奔走シ專ラ身ヲ學事ニ委スル能ハズト雖モ孜々汲々暫時ノ暇ヲ以テ學問智見ヲ彼ニ取リ此ニ集メ恰モ隆冬積雪中ニ飢鳥ノ食餌ヲ求ムル如ク一箇剛勇ノ精神ヲ皷舞シ艱難ノ勁敵ト不撓ノ精神トヲ養成シテ遂ニ大成ノ効ヲ奏シ始メテ固有ノ目ヲ達スルモノナリ

豈艱難ノ前ニ臨ンデ逡巡スル者ノ能ク堪ユル所ナランヤ嗚呼少年諸子モ資財ノ乏シキヲ以テ口實トシ假面ヲ飾スル如キ卑屈心ヲ起ス勿レ今ヤ諸子ノ好敵手即チ艱難眼前ニ現出セリ盍ゾ速ニ剛勇ノ精神ヲ喚起シ奮フテ敵手ト戰ハザル吾人ハ西人ノ語ヲ假リテ旗章ニ大書シ諸君ト共ニ進ンデ前途ヲ平夷ニセント欲スル者ナリ

評曰　屑々相應而東都留學者頂門之一針

## ○○蠶ノ解

幡羅高等小學二年生　青木たけ

蠶ハ小虫ナリト雖人ノ爲ニ大ニ利益アル虫ナリ桑ヲ食シ春蠶夏蠶秋蠶等ノ區別アリ第一



獅子第二鷹第三船第四庭ノ眠ヲナシ而シテ後チ繭ヲ作リ其繭ハ糸ヲ製シ絹ヲ織リ以テ人生ヲ助ク嗚呼蠶ハ小虫ナリ而シテ此功業アリ人トシテ志業ナケレハ蠶ニモ若カザルナリ

## ◎秋日山行記

大里郡御正村　持田宗愛

時維レ明治廿四年十月殘炎稍々減シ金風颯瑟トシテ山野ヲ吹キ三伏ノ幽鬱一時ニ散スルガ如シ偶々學友兩三輩來リ誘フニ巖殿山ニ遊ハンコヲ以テス余舞手踐足喜ンテ之レニ應ス乃チ一瓢ヲ腰ニシ路ヲ村南ニ取リ直ニ山ニ向フ此ノ日ヤ天氣晴朗一點ノ塵雲ナク遙空一碧恰モ水ノ如シ行クヿ少許ニシテ某村ニ至ル突然骰々トシテ雷ノ如ク鼓トシテ鼓ノ如キ聲ノ耳ニ入ルアリ頭ヲ回ラン驚キ望メハ路傍丘崖數丈ノ素練ヲ掛クルアリ傍ラニ石榜アリ表シテ權現瀑ト云フ乃チ休憩シ手足ヲ洗滌ス精神快然タリ既コノ南方ヲ指シ曲折數回漸ク山下ニ臻ル山麓ニ都幾川アリ水滿チテ山影倒ニ映シ下流ニ一橋ヲ架ス之レヲ渡レハ則チ巖殿山ナリ坂徑迂餘蘿葛ヲ攀チ荆棘ヲ排キ此レニ脫シ彼ニ引キ漸クニシテ山腹ニ至レハ平地數十弓中央ニ一堂アリ堂扁シテ巖殿觀世音ト曰フ傍ニ古井アリ乃チ就テ口ヲ

漱キ手ヲ滌ヒ以テ拜一拜ス拜シ畢ツテ又山腹ヲ迂回シ巔上ニ向ヒ所謂九十九峰最モ高キ處ニ到リ紅葉ヲ綴キ席トナシ盒ヲ開キ瓢ヲ解キ對酌數回一坐皆醉フ偶々麓川ヲ臨メハ漁舟二三泛トシテ碧波ノ間ニ搖曳シ後林ハ秋霜色深フシテ錦ヲ織ルガ如ク北望スレハ故園蓬蒿トシ村落遠ク連リ東ハ松山ノ市街家屋櫛比白亞商旗樹間ニ隱見タリ右顧左盼相ヒ猷シ相ヒ酌シ或ハ吟シ或ハ歌フ眞ニ之レ絶景中ノ絶景愉快中ノ快愉ト謂フベシ既ニシテ晩鴉西ニ飛ヒ兎魄東天ニ躍ル乃チ具ヲ收メ歸ヲ促シ又堂前ニ一拜シテ去ル

評曰　叙事典贍遊記文之上乘

## ◎◎ 德川家康

埼玉縣北埼玉郡　羽生高等小學校生徒　狩野時二　十二年十月生

德川氏ハ源姓新田義重ノ第四子義季始メテ德川ト稱ス此ヨリ後十四世ヲ經テ廣忠ニ至ル此間常ニ三河ニ在リ深ク民心ヲ得家康ハ實ニ廣忠ノ子ナリ天文十一年十二月二十六日ヲ以テ岡崎ニ生ル幼名竹千代ト云フ長シテ博學衆ニ超ヘ幼ニシテ信長ニ從フ信長薨スルノ後秀吉ニ從フ秀吉薨スルノ時其子秀頼幼中ニシテ緒ヲ繼グ能ハズ時ニ家康民心ヲ得秀吉ノ諸將爭テ之ニ從フ威望甚大ナリ石田三成之ヲ見テ喜ヒス小西行長浮田秀家上杉景勝等ト謀リ家康ヲ亡サント謀リ先景勝ヲメ兵ヲ會津ニ上ケシメ誘テ家康ヲ東國ニ下シ三成等西ヨリ追擊東西狹擊セントセシニ家康之ヲ知リ小山ヨリ西ニ歸リ關ケ原ニテ三成等ト戰ヒ遂ニ大ニ之ヲ敗リ後大阪ノ役ニ秀頼ヲ亡シ遂ニ秀吉ニ代テ立ツ此ヨリ綿延三百年德川氏大平ノ基固シ

## ○雪中觀梅ノ記

北埼玉郡羽生高等小學校三年生　堀口治太郎

宿雪已ニ霽レテ四方皚然タリ偶想ヒ起ス某所ノ梅園今正ニ盛ナラン神往魂飛ブ時ニ友人兩三輩來リ余ニ勸ムルニ雪ヲ冒シテ梅ヲ觀ルヲ以ス余欣然之ヲ諾シ乃チ家ヲ出テ且談シ且行クコト數町該園既ニ百畝ノ近キニ在リ遙ニ白雲ノ模糊トシテ天ニ彌リ地ニ覆フヲ見ル余輩踊躍馳セテ之ニ赴ケバ梅花數百株爛熳トシテ雪ト艶美ヲ競フガ如シ而シテ園中ヲ徘徊スルニ槎枒タル老樹ハ石ニ枕シ地ニ伏シ或ハ半身凋枯シテ花尙爛熳タルアリ或ハ蛟龍ノ怒テ天ニ騰ラントスルガ如キモノアリ或ハ內心朽チテ外皮猶存スルモノアリ千態万狀一々紙上ニ盡スベカラズ如之花香馥郁紛々鼻ヲ撲チ身ハ恰モ仙境ニ在ルカ如シ是ニ於

テ花中ニ悲ヒテ或ハ詠シ或ハ歌ヒ賞歡スルコト多時悒鬱ノ氣ヲ一時ニ放散シ談笑己ニ足ル時ニ夕陽西ニ傾クヲ見驚キ愛ヲ割キ家ニ歸リ洋燈下ニ此記ヲ草ス

## ◎忍耐ハ百事ノ基礎ナルヲ論ズ

加藤善作

抑モ宇宙間ノ萬物一トシテ障碍物アラサルハナシ行カント欲スレハ必ラズ山河ノ險アリ航セント欲スレハ風濤ノ難アリ天地間ノ事業ニ於ケル亦然リ故ニ能ク我國固有ノ千坐不屈百折不撓ノ玄氣ヲ保ツ大和魂ヲ養成シ以テ事ハ勉強ニ在リトノ格言ニ倣ヒ其勞ヲ厭ハズ倦マズ事ニ從ヒ其器量ヲ磨クニ非ラズンハ決ノ業ヲ遂ゲ其志ヲ遂クルヿ能ハス諺ニ言ヘルアリ曰ク勉強ト忍耐ノ父母相待ツテ玆ニ幸福ノ子ヲ生スト信ナル哉言ヤ此語タル簡クリ單タリト雖以テ能ク本題ノ骨髓ヲ穿チタルモノト云フ可シ中庸ニモ他人一度之ヲ能クスレハ己レ之ヲ百度シ他人十度能クスレハ己レ之ヲ千度スト更ニ反言スレハ人忍耐ノ心アレハ以テ事ヲ成ス可シトナリ試ニ思ヒ泉ノ谿谷ヲ出テ、遠ク江海ニ達スルモノハ險厓絶壁ノ間ヲ迂回シテ或ハ岩石ニ妨ゲラレ或ハ苔草ニ遮ラレ千折万曲漸ク平地ニ出レハ



復タ幾度カ賤夫野人ノ汚辱ニ遭フ而シテ尚ホ能ク耐ラヘテ抵セス抗セズ終ニ能ク大海宏洋ノ樂アリ之ヲ人事ニ譬フレハ古昔支那ノ張良ハ履ヲ黄石公ニ捧ゲ韓ノ韓信恥ヲ胯下ニ忍ビ英名ヲ万世ニ轟シ又伊太利日諸瓦ノ「コロンブス」ハ艱難辛苦ヲ蹈ンテ亞米利加大陸發見ノ大名譽ヲ荷ヘリ嗚呼此ノ大業ヲ遂ケ大英名ヲ万世ニ轟カシタル其根本何レノ媒者在リテ然ルカ曰ク啻獨リ忍耐ノ力アルノミ然ラバ即チ他日有望ナル有爲ナル青年諸君宜敷ク以テ是ニ鑑ミ思考ヲ固フシ以テ能ク事ノ勞ニ堪ヘザル可ケンヤ

評曰　譬喩合題

## ◎◎ 鬼あ百ぢび

埼玉縣川越高等小學校生徒　榎見郁三郎

この頃の、おつさいみじくてくさやの一室よこもり、書よまんとれもへど、あつさのかたきよたへぢ、文かゝんと欲それば、ねむげのあだよをかされ、なにごとも之なす能はず、ゝゝでやかゝるをりぞ、舟遊などして、よゝろをやしなひ、からだをつよむる時なる、君ざちゝ、いゝに、賛成したまはずやと、二三人の同じまゐびの友をゝざなへば、みなゝは、よゝとゐ

り、たのれらも、さほりせしおりなれど、とうべなへぬ、さていうるる河ぞ、ようるべきと、うたらうゑ、ちのきヱたりの、いさぬまといふおろよかめれといへど、さとさだ先ぬ、道のほどくさ〳〵のもれのたりして、いさぬまといふにいたりぬきしによりて、とほくみづの上をみはたせど、みづくさとよべるくさおんおほくをへいづ先る、さてのべき船や、あると、あたりを見渡せバ、ちのきわたりの家ホ一二艘あめる、家のある家にあへてろがふねうりぬ、主にこのぬまのまはりろこゑくと、とへは、いましへは、一里といへしが、ちかきころは、改正とおりて、一里あまり半里とこそ聞きしの、といへぬ、さてろがふ糸のりて、こぎいでぬ、されど、なれぬわざなれバ、うあさこなたにさまよひ、とざまゆき、こざまに、もきなどして、あたりの人もや笑ふめり、うなたのふ糸よとるをのこごちは、なにとをするならむなどのたらへてかはる〳〵おぎゆきぬ、みづのなかをみるに、ひしといふもの、いみじうありき、友の人はそのひしをたうべき、またそがひしをなんとるものもあまた居りき、とうくするほどに、みなみのきはにいたりぬ、すこしやそらうましに、いざかへ



らんと、友のひとのいひけれど、おのれは、こたびの船遊は、きようなのらむ、いとあかぬことゝと、ふもへつ〳〵かへりもくほどに、ぬまのながれいずるくちよやありけむ、みずいときよくてかはの如くながるれバくろかからねど、くろせかはとやナそべきなど、友の人のいへければ、みなのものさもこそいふべけれ、といへき、さてそのかはあ先るをいやます〳〵さかのぼりつ〳〵、ゆくほどに、たのしびいよ〳〵まさりて、隋の楊帝もかくぞおぼへしなゆりなどいふ、かくゆくにこぶねうちのりて、いをとるをこども、いとおほかりけり、かれらが心の中のうれしさは、いかをかりとおぼへていとうらやまし、そこらみわたせバ、いまはは早開墾のわざなんをこりて稲田とおりたるもありきいねのしたりがほに、はいだしたるもあり、水い八九分通りあれぞおのれは十分によろこび仙境よもやあなおらんとおもはれき、さて日もいよ〳〵かたぶきて西山ちかくなりけるよと、いふをきゝて、かへらんとおもふこゝちはなけれども、あゝの課もあるとおほへバ、次のときはわさとくよりなどいへて、ろこ〳〵ゑ愛をさきてもとてききしところを下りて、ふねかりしわるトの

がりに、つきぬ、禮なぞいへて、そこまかりぬ、家いかへり見れば、はやともしひつくる頃なりき、さてこの日のうれしさわすれんとかたけれど、かくなんにつきに、かきつけぬ

評曰　詞氣委婉少年社會稀有之傑作

## ◎夢遊荒川之記

大里郡熊谷　松崎貞吉

炎威赫々長空皦然絶テ纖翳ナク己ムナクシテ單身袂ヲ投シテ荒川堤防ニ至レバ則涓々タル流水ハ以テ余ノ來ルヲ迎ヒ青々タル草樹ハ以テ余ノ到ルヲ待チ皓々タル水鳥点々タル群魚皆以テ余ノ訪ヲ喜ブガ如ク神氣爽快胸宇豁如頓ニ愉快ノ情ニ勘ヘズ乃チ舟ヲ中流ニ棹シ衣ヲ擲チテ香魚ト急流ノ强ヲ爭ヒ或ハ手足ヲ躍シテ皓鳥ト捕魚ノ權ヲ鬪ハン木竹ヲ揮テ蟋蟀ヲ困メ石ヲ投シテ群鳥ヲ驚カシ或ハ灼然タル日光ニ座シ或ハ蒼然タル樹木ニ蔭シ仰テハ日光天ヲ瞰メ俯テハ碧水ヲ弄ス既ニシテ太陽西山ニ沒シ晩鐘暮テ報ス乃チ恍惚歸路ニ就カントス忽チ蕭々一陣ノ隱風來リ慘然トシテ天地爲ニ黯黯タリ既ニシテ幾万ノ孤燈艨艟トシテ余ガ身近ヲ防隍シ中ニ長髮白衣ノ鬼蒼顏紅顙ノ鬼余ガ眼前ニ直立セリ余己ニ魂飛ビ目眩シ体縮シ進退茲ニ谷マリ爲ス所ヲ知ラス須臾ニノ則チ悟リ始メテ覺ユ是必ズ狐狸ノ惡戲タルヲ於是余凜乎トノ腰間ノ秋水ヲ探リ鐵拳彼顏ニ加ヘントス霹靂一聲倏忽トシテ覺レハ天輝々トシテ日尙餘リアリ焉ソ知ラン是レ午睡ノ一夢ニノ身ハ獘屋ノ隱階ニ臥シ肝流滲トシテ玉ヲ爲シ皷動烈シク心臟ノ潰ントスルヲ覺ユルノミ嗚呼是レ夢ノミ余因テ一大息シテ曰ク浮雲明月ヲ蔽ヒ狂風麁花ヲ散ラス禍福窮リナクシテ諸事意ノ如クナラズ一得一失一利一害人世ノ通理ナル哉東風ニ清香ヲ放ツノ梅花ハ始メ嚴寒ニ耐忍シ陽天ニ芳姿ヲ呈スルノ櫻花ハ前ニ雪霜ノ苦アルニアラズヤ嗚呼萬物其度ヲ誤リ慾ヲ貪リ情ニ過キ愛ニ溺レル者亦以テ余ガ狐狸輩ニ玩具視セラレン轍ヲフムナラン語ニ曰ク人生ノ航海ニ於テハ道理之レガ羅針盤タリ情慾之レガ大風タルト信ナル哉言ヤ聊カ感スル所アリ此記ヲ作ル

評曰　神思飄逸有讀莊子之想

## ○○猴ノ解說

埼玉旭研究會員　齋藤甚藏

猴ハ人ニ次キ動物中高等ノ獸類ニシテ其種類甚ダ多シ體格甚ダ人類ニ似テ足ナクシテ四手アリ故ニ攀チ或ハ直立歩行スル等至ツテ自由ナリ從ツテ其智モ他ノ動物ニ優ルヲ以テ人之ニ舞蹈或ハ其他ノ技ヲ教ヘ戲ニ供スルニ至ル然リト雖モ善惡ノ區別ヲ知ラズシテ徒ニ眞似ヲナスノ癖アリ嗚呼是レ獸ノ獸タル所以カ

## ◎兄弟

北足立郡大砂土村　武藤金次郎

夫レ兄弟ハ体中ニ同一血液ヲ藏メ腦漿中ニ同一ノ教育ヲ蓄ヒ同一ノ手ニ愛撫セラレ同一ノ規則ニ裁制セラレ同一ノ家ニ生長シ同一ノ苦樂ヲ受ケ同一ノ物質ヲ以テ作ラレタル靈魂ト肉體トヲ有スルモノニ非ズヤ故ニ互ニ眞實ヲ以テ左提右助シ善事ヲ勸メ不善ヲ矯メ究之相濟ヒ困苦相助ケ親密諧和シテ其情誼ヲ夫フベカラズ兄ハ其弟ヲ保護誘導シテ不善ニ陷ラシメズ弟ハ從順ニシテ兄ノ訓戒ヲ遵守シ毫モ之ヲ凌侮スルヿアルベカラズ是レ兄弟タルノ常道ナリ然ルニ世人往々兄ヲ兄トセズ弟ヲ弟トセザルモノアルハ豈愼マザル可ンヤ



評曰　兄弟ハ靈魂上ヨリ云ヘハ情欵ノ作用アリ肉体上ヨリ云ヘハ利害同濟ノ義務アリ此文簡而意至

## ◎◎江南學校之記

大里郡江南學校温習生　市川柳造

江南學校ハ其名ノ如ク荒川ノ南ニシテ大里郡御正村大字三本ニ在リ四面皆田野ヲ隔テ、遙カニ部内諸村落ヲ望ム校舍ハ三棟ヨリ成リ凹字形ニシテ葺クニ瓦ヲ以テス校内ニハ教員扣所應接所幷ニ五教場アリテ生徒ノ數凡二百餘人ナリ前ニハ美麗ナル門ヲ搆ヘ門内ニハ庭園アリテ之ニ植ウルニ佳樹芳草ヲ以テス校舍ノ後ニ遊歩場アリテ校舍ノ建築其當ヲ得タル者ノ如シ然レ𪜈運動場ノ狹キハ本校ノ遺憾トスル所ナリト是諸先生ノ説ナリ

評曰　結末數語價千金

## ○萍ニ題

埼玉郡第三高等小學校生徒　金子祐治　十三年三ケ月

萍ヤ萍ヤ汝奚ゾ水上ニ泛々タルヤ或ハ東風ニ隨ヒ或ハ西風ニ漂サレ瓢々乎トシテ據ル處ナシ若シ我輩少年ニシテ汝ガ如クニシテ猥リニ世ノ風潮ヲ羨ミ朝ニ英語ヲ學バント欲シテ

夕ニ獨語或ハ漢學或ハ國書ニ渉リ仮令斯ノ如クナラザルモ或ハ和文ヲ繙ク一二葉或ハ文ヲ綴ラントスル三四行彼ヲ見ントシテ是ニ遷リ浮々瓢々一トシテ成ル無クンバ將之ヲ何トカ謂ハン莽ヤ莽ヤ汝ガ輕浮ヲ誠ム然レ𪜈風波ニ靡テ敢テ彼ニ抗セザルハ我ガ素志ニアラズ外面ノ柔ナルハ我ガ身ヲ傷ケンガ爲ナリ徒ラニ世ノ少年子弟カ屢流行ニ心ヲ傾クルモノト同視スル勿レト謂ハヾ汝カ度量ノ深遠ナルニ駭ク因テ一言ヲ題ス

評曰　含意不露自是大家口啄

榛澤郡深谷町　須藤厚一郎
七十一番地　十五年

## ◎◎萍ニ題ス

池水西セン平曰ク西シ流涙東セン平曰ク東シ一進一退一波一動朝ニ輕花唇ヲ動カスノ流ニ開イテ夕ニ奔河濁涙ノ中ニ埋沒シ以テ其身ノ薄命ヲ歎スルモノハ之レ即水中ニ浮漂スル莽是ナリ元此莽ノ性質タル馥郁鼻ヲ撲ツ梅花ノ香アルニ非ズ艶麗目ヲ樂シマシムル櫻花ニ美アルニ非ズ只彼等ハ水中ニ生レテ水中ニ枯死スルモノナリ若シ夫レ人類ト生レテ其國家ニ盡ス可キノ義務ヲ知ラズ其心ニ取ル可キノ識見ナク只ニ流行的ノ奴隷トナク利慾的ノ從僕トナルカ如キ者ニ至テハ之レ即人類ノ莽ニシテ草木ト何ンゾ擇ハンヤ語ニ云フ天下亂レテ忠臣出テ激涙怒ツテ浮草亡ブト知ラズ四海涙靜ナルノ今日能ク絶對的ノ大事業ヲ建テ以テ彼ノ梅花的ノ芳名櫻花的ノ德操ヲ顯ハス者ハ抑何人ゾヤ感アツテ一言ヲ題ス

評曰　言殺題意了矣敬服々々

北埼玉郡
屈巢村小學生　雪窓八千代

## ◎麥蒔之記

黎明餐ヲ喫シ足ニハ草鞋ヲ穿チ手ニハ耒耜ヲ携ヘ馬ヲ鞭チ以テ田野ニ向フ是即チ農家播種ノ候也乃チ家父ニ隨ヒ行ク〻數十武已ニシテ我畝ニ至レバ四隣ノ鷄鳴頻ニ相和シ遠軒ノ犬吠ハ互ニ相應ヒ聲最モ高ク氣最モ快豁ニ恰モ吾儕ノ早出ヲ賞スルニ髣髴タリ商風蕭颯田畝ヲ渡リテ爽ニ碧天清澄綠リ掬ニ滿テリ滿眸ノ地上ハ白霜ノ降下スルアリテ益々清ク其狀殆ド銀沙ヲ散在スルカ如ク青々タル小草ハ將ニ枯レナントシ嫋々風靡ス彌々且ニ業ヲ采ラントスレバ雙手ハ西風ノ爲ニ胼胝セラレ而足ハ霜露ノ爲ニ侵サレ手暖メント欲

スレ𪜈法ナク足將ニ顚ゼントシテ空シク佇立スルノミ時ニ東天紅ヲ呈シ旭日曈々トシテ三竿ニ昇リ幸ニ耕耘ニ從事スルヲ得タリ是ニ於テ乎少娘若男三々五々或ハ赤巾ヲ纏ヒ或ハ白帽ヲ頭ニシ鍬鍬ヲ肩ニシ以テ野ニ至ル我カ弟モ亦欣然トシテ此ニ來ル即チ衆皆力ヲ極メテ上塊ヲ打破ス今秋ハ降雨稀ナル故ニヤ甚ダ大ニ一擊一轉其堅キコト石礫モ啻ナラス己ニ之ヲ畢レハ爺ハ矻々吠ヲ作リ婦ハ忙手種ヲ下ロシ孺子少娘屬々相隨シ或ハ謳或ハ笑喧々囂々流汗衣ヲ濡スヲ知ラス各先ヲ爭ヒ頡頏土ヲ覆フ余モ亦高ラカニ謠ヒ朗ラカニ吟シ衆ト共ニ之ヲ同フス斯ノ如ク寸隙ナク謳歌談笑詼諧競爭ノ下ニ働作スル者ナレハ辭ス可ク厭フベキノ勞役界ハ變シテ愉々快々タル娛樂場トナリ身体自ラ强健ニ意志自ラ活潑ニ少シモ勞苦ヲ覺ヘサルナリト百感心ニ簇リ以テ社會万般ノ事ヲ推ス而シテ一抹ノ夕陽万山紅楓ノ中ニ沒シ蒼然タル暮色遠キヨリ來リ繁星烱々大夜空ニ輝キ村寺ノ晩鐘遠ク万頃ノ田畝ニ響キ頻リニ歸ヲ促ス者ノ如シ乃チ耕具ヲ整ヘ將ニ歸途ニ向ハントスレハ皓皎タル圓月東山ノ巔ニ懸リ光彩嬋娟滿隴爲ニ明瞭先キニ種子ヲ蔽フ地指メ之ヲ示スベシ



即チ月光ヲ借リ飯路ヲ照シテ家門ニ入ル飯後大ニ感スル所アリ若シモ吾輩本國ノ農民タル者悠々緩々逸樂是レ事トシ季ニ及ンテ播種セザルキハ啻々明年ノ收穫セザルノミナラス吾輩四千万ノ同胞ハ頭ヲ并ベテ屬々餓死スルニ至ルヤモ知ル可カラス苟モ今ニシテ此感ヲ抱キ此患アリトセハ坐臥傍觀淫逸醉吟以テ此好季ヲ失フ可ラザルナリ是吾輩幾多ノ農民タル者進ンデ其任ニ當ル所以ニシテ茲ニ今日播種スル所以ナリ古人モ言ハスヤ事前ニ定ムレハ則チ躓カスト宜ナル哉金言青年ノ學途又此麥播ノ如クナラン歟聊カ記シ以テ他日ヲ戒ムト云爾

## 龜と鶯の話

川越高等小學校　鈴木清太郎

或る長閑な日に、龜が海濱に偃曝して居たりけるが、數多の海鳥が面白く空中に翔翱するのを見て羨敷く思ひ、世に生れ乍ら、已おだは飛ぶことも出來ず、不運わけゞ誰もおれに飛ことを教へて呉る者は無いかと、獨りて不平鳴しておると、この時鶯が龜の悲歎をきゝつけ、龜の所へ飛來り「もし龜公を拙者が空中高く伴同ひするあら如何なる報酬を給はる

ゆと請求すれば、龜莞爾トシテ「左すれば紅海にある富はみな貴兄に呈しやうさんと」陳ければ鼈「デハ御教授申さん」とて龜を平に掴んで雲際近く飛あがりぬ、稍て鼈「サーこれから自身で飛でごらんなさいと突放せば、龜は天足地首よ山嶽の絶頂に墜ちて甲殼を微塵に打碎きけり、そして龜歎息して「空中に飛揚うと思た爲にこんな惨然なことよなつて、今ぞはもう地の上を匍匐ことも出來ない、

足ヲ不足トスレハ災害必ス我身ニ及ブ不足カ物ノ足ルモノナリ

## 冬夜書ヲ讀ム

南豫玉郡第一高等小學校四年生　江藤行藏

評曰　文短意長

寒雨蕭條トシテ點滴囂シク破蕉戰々トシテ窓牖ヲ撲ツ眠ラント欲シテ眠ル能ハス起テ青燈ヲ挑ケ案ニ凭レハ二三ノ典籍アリ乃チ日本外史ヲ取テ之ヲ繙ク楠子櫻井驛ニ於テ愛兒ニ訣ル、ノ條及湊川ニ於テ殉死スル、ノ段ヲ讀ムニ及ヒ血涙ノ襟ヲ沾フヲヲ覺エサリシ少焉アッテ窓ヲ排セハ陰雨漸ク收リ鎌月西天ニアリ



## 觀紅葉之記

枥木縣梁田郡御廚學校生徒　三田善次

余一日机ニ凭ッテ書ヲ繙ク偶柴扉ヲ敲ク者アリ出テ之ヲ見レハ同窓面三郎ナリ余ニ謂テ曰ク昨夜繁霜林ニ滿ツ想フニ行道山ノ光景方サニ見ルベシ請フ清賞ヲ與ニスベシト余曰ク善シト即チ行李ヲ調シ袖ヲ連テ亘流ヲ渡リ芦街ヲ過ギ斐嵯山下ノ蹊ヲ行クヿ殆ト三里ニシテ漸ク行道山麓ニ達ス此日天氣清朗一點ノ雲ナシ先ツ眼ヲ放テ之ヲ望メハ數千ノ楓樹染盡シテ彩霞ノ如ク或ハ濃、或ハ淡、枝ヲ交ヘテ溪ヲ掩ヘ、山ヲ包ム、所謂二月ノ花ヨリモ紅ナル者更ニ歩ヲ進メテ山上ニ至レハ四面一色灼々タル紅雲其涯ヲ知ラス身ハ是レ錦幕ノ中ニ在ルカト疑ハル已ニシテ夕陽西ニ呑ッキ斜照ノ相映スルモノ甚タ奇觀ナリ然リ而シテ山間ノ夜途險難ナルヲ恐レ敢テ歸路ニ着ケリ此時余紅葉ノ一枝ヲ擔フ友曰ク何ノ故ゾ余曰ク諺ニ云ハズヤ錦ヲ着テ鄉ニ還ル竊ニ之ヲ學ブノミト共ニ笑テ山ヲ降リ家ニ至レハ已ニ點燈ナリ依テ之カ記ヲ作ル

評曰　飜反錦字而文彩飛動

## ▲垂釣ノ記

埼玉縣中葛飾郡南櫻井村
總葛學校高等四年生　關口盛一

明治辛卯八月一日机頭ニ坐シ怠倦ヲ生スルニ際シ適マ門外余ヲ呼ブモノアリ出デヽ之ヲ迎フレバ親友二人來リテ余ヲ釣魚ニ誘ヘリ余之ヲ諾シ竿ヲ携ヘ談笑行歩數町ニシテ江戸川ニ達シ一青柳ノ下ニ至リ竿ヲ下ス此日天氣清朗ナルヲ以テ大小雜魚遠近ニ躍リ一度竿ヲ垂ルヽ毎ニ魚ノ釣レサルナシ既ニシテ太陽西山ニ沒スルヲ知ラズ居ル須臾螢火ノ飛行スルヲ見ル乃チ腰扇ヲ以テ之ヲ打テバ點々水ニ落アリ漸時ニシテ數十匹ヲ穫螢火ニ道ヲ照ラシ竿ヲ背ヒ友人ヲ促シ愛ヲ割キ家ニ皈ル

## ●夢ミシヿヲ記ス

秩父郡第一高等
小學校三年生　淺海　連

一夜讀書ニ倦ミ思ハス机上ニ伏ス須臾ニシテ一室黑雲ヲ生シ雲中ニ丈餘ノ大入道顯出スヽ鰐魚ノ如キ口中ニ妖火ヲ比哺シ巨眼ノ爛々タルヿ嚴下ノ電ノ如ク手ニ長大ナル秋水ヲ提ケ今ヤ余ニ向テ言ントスルノ狀アリ余危座シテ平伏セシニ大入道大呼シテ曰ク吾日々汝ノ行狀ヲ窺フニ白壹學校ヨリ歸ルヤ晝眠ヲ恣ニシ夜ニ至レハ又此ノ如シ頑愚怠惰モ亦甚



タシカラスヤ未來ノ日本ヲ組織スルハ汝等ノ責任蓋シ至大至重ナリ豈之カ任ニ當ル計畫ヲ成スナクシテ可ナランヤ今吾汝ニ語ケン汝能ク心ヲ修メ身ヲ慎ミ輕噪浮薄ノ徒トナラス着實允當ナル眞ノ日本男子トナリ源泉混々晝夜ヲ捨テス學事是勤メ家業是レ勵ムヿニ心ヲ專ニセヨ決シテ長眠ヲ貪ル時ナカレ又飲酒喫煙スル勿レ飲酒喫煙ハ身体ノ害ナルヅ紅顏腰柳狐狸的ノ巢窟ニ足ヲ蹈入スル勿レ之レ一世ヲ過マル基ナルヅ驕奢タル勿レ驕奢ハ外面的ノ美ニシテ內面却テ醜ナルヅ右ニ示スハ空言暴理ニ非スシテ汝カ守ル精ナルヅ吾汝ノ怠惰ヲ看過スルニ忍ヒス一言遂ニ爰ニ及ブト言終テ入道黑雲ト共ニ滅沒シテ只殘ルモノハ机上ノ殘油ニ悲光ヲ發スル一孤燈ノミ是レ何者ノ所爲ナルカ狐ニ非ス狸ニ非ス思フニ天ノ人ニ化シテ夢中ニ余ヲ戒メタルニ外ナラス嗚呼噫々傍ニ人アリ問フテ曰ク何事ナルヤト余告グルニ實ヲ以テス傍人曰天ノ足下ニ敎ヲ授クルモノニシテ則チ足下ハ幸福ナリ故ニ此ノ好福ヲ空シクスハ不可ナリト因テ一文ニ綴リ以テ先生ノ訂正ヲ請ヒ後來ノ戒メト爲スト云爾

評曰　用意苦巧筆亦合

◎駑馬峻坂ヲ跨ユルノ說

男小學校高等四年生　金子多次郎

朱子曰ク陽氣ノ發スル所金石モ亦透ル精神一タビ到レハ何事カ成シ難カラント宜ナル哉今茲ニ馬有リ體驅衰老四足凭弱此身ヲ以テ峻坂ヲ跨ユルノ酸馬ニ較ラレバ身ヲ勞スル非幾位ナルヲ知ラザルナリ此時ニ際シテ忍耐不撓ノ精神ヲ以テ接スレバ如何デカ成シ能ハザラン即チ彼ノ昔小野道風ノ眺メシ蛙ノ如ク跨ユ能フコ必然ナリ人ノ世ニ處シテ以テ一事一業ヲ成サントスルハ恰モ孤舟ニ棹シテ萬里ノ鯨濤ヲ航スルガ如シ能ク其遂遠ナルヲ堪ユ能ハン其風浪ヲ凌ギ百折撓マズ鋭進シテ止マザル所ノ勤勉力ナクンバ斷シテ安穩ノ地ニ達スル事ヲ得サルナリ故ニ唯一箇剛勇ノ精神ト一箇正經ノ目的トヲ以テセバ事ノ成就スル事果シテ疑ヲ容レザル所ナリ是ニ反シタル僅少ノ碎碎物ニ恐怖シ優柔不斷徒ニ經過スル者ニ於テハ敢テ及ハザル所ナリ古語ニ道近シト雖モ行カザレバ至ラズ事小ナリト雖モ成サザレハ成ラズト珊カ感スル所アリ此說ヲ作リテ以テ自ラ戒ム

評曰　關世教

# 重言見立大相撲

## 東之方

大關　用水の水
關脇　元朝の朝
小結　山中の山中
前頭　勝負ろ負勝附
前頭　美しい美女
前頭　歩る歩行
前頭　舟ろ舟頭
前頭　赤いむぢりえん
前頭　すて子の子
同　何日の日
同　抜身を抜く
同　御神酒の酒
同　燈光と燈ひ
同　見くみ見んかふり
同　袖の袖子
同　ちらゝちらゝ
同　乗るものに乗る
同　白髮の髮
同　ろろだんの名ん
同　都合合して
同　ならせんの錢
同　黑らびんろうじ
同　今の當世風
同　寺のがんぜん
同　夫婦二人づれ

世話人　千物物
叡山ろ山

## 西之方

大關　新米ろ米
關脇　風呂屋ろふろ
小結　畫中ろ白中
前頭　借錢ろのを
前頭　寺子の子
前頭　城下しあ
前頭　家内の宮ち
前頭　正月ろ月
前頭　持びやう持
同　大井川の川
同　月夜のやん
同　珍らしい珍物
同　卷物の一卷
同　流行が流行
同　日雇に雇れ
同　下へ下る
同　目のえぬ盲
同　つめたい冷えし
同　遠ひ遠方
同　湖水のみづうみ
同　耳がぱんか
同　こしまえし
同　新ふしい新宅
同　最初の初り
同　信ろ ろなの

世話人　そせん放屁
穴の穴

## 爲御心得

司行

半紙の紙
寶子の子
施の施
行行
重寶な寶

## 取頭

長町の長
嚴ら嚴
寒
御御
御ご
苦く
馳走

## 勸進元

差添人　大な大佛
唐の唐人

# 讀書の栞

○かなの用ゐ方

假名の用ゐ方ハ昔しより一定の方法ありしものなるに近頃大ゐ亂れたるものあれば左に一例を擧て人々の注意を乞はんと思ふ

へんけいかなきなたをもッて

辨慶カ長刀ヲ持ッテ

トあるを べんけいがなぎなたをもッてト讀ませば如何

のどかなるかすみのへのにほひかな

長閑ナル霞ノ野邊ノ香ヒカナ

トあるを のどかなるかすみその への にほひかなと讀ませば如何



# 文字書ちがひ見立

上正しき方 下書違ひ方

| | |
|---|---|
| 大關 | 刻煙草を割煙草 |
| 關脇 | 御秡を御拔 |
| 小結 | 矢を失 |
| 前頭 | 御誂を御誹 |
| 前頭 | 籐を藤 |
| 前頭 | 手柄を手丙 |
| 前頭 | 吸物を汲物 |
| 前頭 | 末を未 |
| 前頭 | 釘を針 |
| 前頭 | 力持を刀持 |
| 前頭 | 書師を畫師 |
| 同 | 稚子を雅子 |
| 同 | 產科を產料 |
| 同 | 帆かけを帆かけ |
| 同 | 扣を扣 |
| 同 | 棟上を揀上 |
| 同 | 印肉墨を印肉黒 |
| 同 | 握を摑 |
| 同 | 一才を一戈 |
| 同 | 鰌汁を鰌計 |
| 同 | 鳥居を烏井 |
| 同 | 短冊を短尺 |

世話人

硫黄 いおう ヲ いわう
一合 いちがふ ヲ いちおう
蠟燭 らうそく ヲ ろうそく
法樂 はふらく ヲ ほうらく
箒 はゝき ヲ はうき
反古 はご ヲ ほうぐ
豆腐 とうふ ヲ たうふ

此外かなちがひハ澤山あれどもしるさヾ上を正とし下をあやまりと見賜ふべし

行司 定規ヲ定木 算盤ヲ算盤 板木・版木

頭取 貸家ヲ借家 手拭ヲ手掛 詰所ヲ詰所

勸進元 魯魚 烏焉馬

差添人 戒戎 代伐戍

上正の方 下書違ひ方

| | |
|---|---|
| 大關 | 御札ヲ御扎 |
| 關脇 | 賃先拂ヲ貨先佛 |
| 小結 | 料理ヲ科理 |
| 前頭 | 漬物ヲ積物 |
| 前頭 | 五戒ヲ五戎 |
| 前頭 | 代金ヲ伐金 |
| 前頭 | 彫刻ヲ雕刻 |
| 前頭 | 巨燵ヲ臣燵 |
| 前頭 | 篆字ヲ天字 |
| 前頭 | 香奠ヲ香尊 |
| 前頭 | 裏屋ヲ浦屋 |
| 同 | 兩替ヲ兩皆 |
| 同 | 杖ヲ枝 |
| 同 | 博勞ヲ簿勞 |
| 同 | 血の道ヲ皿の道 |
| 同 | 小使ヲ小便 |
| 同 | 進上ヲ近上 |
| 同 | 萩ヲ荻 |
| 同 | 四季ヲ四李 |
| 同 | 禰宜ヲ稱宜 |
| 同 | 商賣ヲ啇賣 |
| 同 | 口演ヲ口濱 |

世話人

富士 ふじ ヲ ふぢ
霍亂 くわくらん ヲ かくらん
帳 ちやう ヲ てふ
療治 れうぢ ヲ りようじ
鹽 しほ ヲ しを
早々 さう／＼ ヲ そう／＼
尾張 をはり ヲ おわり

かなの書き方に注意せざれば大に意味を誤るものあれば能く／＼注意すべし

斯の如くなれは　かなの讀方及び用ゐ方わは注意せざる可らず就中近來洋學の行れしより洋書中より使用せる句点までも漸く普通に行わるゝ次第なれは左に其句点を略記せん

第一　，　コンマ　　第三　：　コロン　　第五　？　疑問

第二　。　半コロン　　第四　．　止リ　　第六　！　歎息

㈠コンマは句切りの最小なる區分を示し　㈡半コロンはコンマを以て示したる區分より大なる區分を示し　㈢コロンは半コロンを以て示したる區分より更に意味の完結したる區分を示し　㈣止りは句切りの意味全く終りたる時用ゐ　㈤疑問は疑を表はし　㈥歎息は感歎を表する句切に用ふ

右の外現今行はるゝ讀書中にハ種〻ある符號あり

一　横線　文句の組立急に變したる時に用ふ

（）　括弧　多く例を擧ゲて論ずる時より用ふ

〃〃　引用　他書より文句を引用する時又は文中に他の人の談話を其儘寫す時なと



に用ふ

# 遊戯

◉智慧札並の法

少き札より一より九迄の數字を書し其札を三枚つゝ三通りより并べ何れよりも算へて拾五となるには左の如く并ふへし

| | | |
|---|---|---|
| 二 | 九 | 四 |
| 七 | 五 | 三 |
| 六 | 一 | 八 |

如斯並れは竪横筋違ひ何れより算ふるも十五となる

又札十六枚に一より十六迄の數字を書し其札を四枚宛四通に幷へ何れより算ふるも四枚の數三十四となすには左の如く幷ふへし

| | | |
|---|---|---|
| 六 | 九 | 十六 | 三 |
| 十二 | 七 | 二 | 十三 |
| 一 | 十四 | 十一 | 八 |
| 十五 | 四 | 五 | 十 |

如斯並れは竪横筋違ひ何れより算ふるも三十四となる

## ○火を食する法

火を食するには里芋の根を日に乾し炭に燒き貯へ置き之に火を点し口に入るや否や口を閉て嚙む可し火傷することなし

## ◎竹籠に生魚を入れ養ふの法

竹籠に生魚を入れ養ふには籃の目に菰蒻玉を摺潰し塗り附け魚を入れ養ふへし

## ◎硯墨なくして文字を顯す法

書んとする壁又は板なとへ密に薄糊にて隨意なる文字と書き其上に黑胡麻又は炭の粉等を振り掛くへし

## ◎花の散落んとするを止むる傳

何の花にても散落んとするあらは花の心に汐水を吹掛くへし二三日は持つものなり

## ◎鷄を何時迄も雛にて置く傳

鷄を何時迄も雛にて置んと思ハヽ雛を小き籠に入れ少しも地を歩まし究き罌子の實と雌黄を混し水交せつして與ふへし斯の如くして失いされは遂にハ羽毛は變するも身体倭小にして雛に同し

## ▲寶來龜を生せしむる傳

凡常の龜を捕へ薑の絞り汁を甲の上に塗り掛け其上に泥を塗るへし斯の如くにして泉水

に放ち置く時い緑の毛を生して人目を喜ハしむるに足る

## ○舞あ〜

是も人〻の能く知る處の　鼻〳〵の遊の作り變へにして　まづ鬼を定め　其鬼ごの
「鳩か舞ふ鳥か舞ふ鳶か舞ふ兎か舞ふ
ト袖て羽ふゝきをしなかゝ云ひますと鬼てなひものか　鳩や鳥の樣に　ホントに舞ふも
のを鬼か云へは鬼と同し樣ふ羽たゝきをし　若し兎や犬の樣に舞はぬものと鬼か云へは
羽たゝきをせぞに居るのくせ　若し間違ひは其人か鬼ふなるか　左もなくは　藝つくし
をとるのてす　お梅か鬼　お春か子
鬼「鳩か舞ふ蝶々か舞ふ鳶か舞ふ犬か舞た
（お春は犬が舞と云ひし時羽たゝきをする）
お梅「アラお春さん犬は舞ませんよ　貴嬢か　鬼
鬼「犬か舞た兎か舞ふ鷲か舞た
（お梅は鬼か鷲か舞ふといへし時　羽たゝきを　せなんた故）



お春「鷲はお梅さん舞ますよ　サア貴嬢か　鬼
右の遊戯い　鬼は羽たゝきをとべき鳥の名を云ふ時　自分で羽ふゝきを　しやうとしま
いと勝手です

# 習字科

## ○執筆法

筆を執るには種々なる區別ありて古人も筆の管をあまり深く執れは運動自在ならす又淺
けれは力乏しと云ひ或は階行草によりて筆を執るに區別あり階書は毫端を去ること一寸
行書は二寸　草書は三寸と說き或は枕腕　提腕　懸腕の區別を立て曰く枕腕とい左の手
くびを右の腕の下にしきて書く法にして小楷と書くに宜し　提腕とい物さくる心持ふし
て中字を書くに宜し　懸腕とい肘をかゝけて書く法にして大字を書くに宜しとおせり兎
も角も字を習ふには古來人々の實地經驗しふる永字八法の事を學ふへし蓋し万字の結構
体勢ふの筆法ふ含先り

永字八法

側　勒　策　掠　努　磔　啄　趯

(一)側　ヲ点とも云ふ　是は腕をそはゝて鋒を三ゝ折る意を以て書くへし

(二)勒　ヲ畫とも云ふ　是は腕をかゝけ仰けて書くへし

(三)努　ヲ竪畫ともいふ　是は鎖の柱の如しと云ふあまり直くなるゝ惡し

(四)趯　ヲ勾とも云ふ　鋒を少し下へふし而して躍らす筆の先をなとらせて　はねるゝ



(五)策　ヲ短畫とも云ふ　鋒を下より上へはねあける意あるへし

(六)掠　ヲ撇　とも云ふ　鋒を少し上へつく意ありて先のまからぬようにすらりと出すへし

(七)啄　ヲ短撇とも云ふ　鋒をつきこむやうにして力を出すなり其形鳥の啄の如くなるへし

(八)磔　ヲ捺ともいふ　腕をかゝけ徐ろゝゝ引留めてはなつなり

## 人口膾炙　詩歌變體

○折句

折句トハ物名ナリ稱呼ナリ凡ヘテ歌題ヲ本歌中ニ讀込ミシ句ナリ

（例）音にきくめにみいりよき出來秋はさみも豐に市かさかえる　蜀山人

右ハおめでたいと云ふ字を讀込みて豐年を詠たるおり又

（例）おき人の昔をくれハあれ世にみしかきぞ數の玉の緒やこれ　六樹園

右ハなむあみだの字を置ていたゞの意を詠せしなり

## ○ 鸚鵡

鸚鵡は人語を眞擬るの故を以て今甲より咏み送りし歌の只一字を變へて返歌となすが如き是を鸚鵡返といふなり例へは

雲の上ハ有し昔にかハらねと見し玉簾のうちや床しき

となりし歌に

雲の上ハ有し昔にかハらねと見し玉簾のうちぞ床しき

と小野小町か返歌せしといふ歌の如き所謂鸚鵡返なり何となれは只やヲそニ變へて自他



を顚倒しさるに止れはあり而して意義明了增答の能盡そ

## ○ 廻文歌

廻文歌の民間に流布する久し就中

長きよのとをの糸ふりのみなめさめなみのり船のをとのよきかる

といへる歌は尤も能く人口ゐ膾炙せり尙一例を示さむ

むら芝でみつ皷草名ハしらし花さくみつゝ摘みて走らむ

## ○ 四十七字歌

いろは四十七字の歌は弘法大師か　諸業無常　是生滅法　生滅々己　寂滅爲樂　の佛語を飜案して今樣となし婦人小兒をして佛敎ゑ歸意せしむるの助となせるよしは人々の能言所あり其は兎も角も四十七字を以て種〻の歌となせるもの多し

君臣　父子　夫婦　兄弟　群　井穿田植　來繁

きみまくら　おやこいもせ　に　いと　むれぬ　ゐほりさうへ　て　來　すゑしける

天地　世歎莫　船櫓繩
あめつちさかも　よをわひそ　ふねのろなは

右細井廣澤ノ作

天地分神　日本成　禮代　大骨齋
あめつちわきかみ　さふるひのもとなりて　ゐやしろを　おほんへもかは　うら

不絶　末幾世
ていけぬ　これそ　たゑせぬ　すゑいくよ

右谷川士清ノ作

雨降　井堰　越　水分　易　諸人　下立
あめふれ　い　ゐせき　と　こゆる　みつわけて　やすく　もろひと　おりたち

植群　苗　其稻　榮
うゑしむらなへ　そのいねよまはにさかえぬ

右本居宣長ノ作

## ○ 和歌ト發句ト詩

和歌三十一文字を以て讀さる意を發句十七文字は讀盡し或は　發句十七文字にて讀みし



心を和歌三十一文字に讀換るも興あるへし左に其一例を示さむ

ほとゝきす鳴つるかさをあかむれはたゝ有あけの月ゝ殘れる

と云ふ歌を

一聲の月か鳴たかほとゝきす

と發句に譯したる話は人の能く知る所なり其と同しく桃青法師の

あつくさやつはものどもか夢のあと

といふ發句を宇滿伎氏い

ものゝふの草むすかばねとしふりて秋風さむし桔梗が原

と本歌に譯せしとそ尤も桃青か「なつくさや」の句は詩の「可憐無定河邊骨。猶是香閨夢裡人」といへる句より轉化し來りし者なり故に發句も和歌も亦詩ゝ轉譯するを得へし

例へは

さくなかに枯枝ばかり春そなき

といへる句を平賀源内は詩に譯して曰く

東風吹百物　草木盡知春　獨在銷魂樹　還同薄命人

ト又白樂天ノ句に

白雲似帶圍山腰　青苔如衣負岩脊

とあると源頼臣在中ハ和歌ヨ譯して曰く

苔衣きたるいはほハまろひけん衣きぬ山の帶するはなぞ

## ○落書

落書とハ故事又ハ判じ物等を引いて斷簡隻句の中に種〻なる意義と言ひ表ハすものにして

午怒生角(牛)　人驚入内(肉)

といへる字謎も東坡か硯蓋に銘ゐ



研石猶在石　硯山已頹見　姜女既去羊　孟子不來皿

といへる字謎も落書に部にして尚一二に例を擧くれは服南郭か或時扇子に題詞と乞ハれし時卒然筆を執りて

大江千里月　小野小町花

と記せるか如き同しく落書に体なり蓋し南郭は扇ふ題そへき句に究し忽ち百人一首に大江千里月見れは云〻に月と小野小町花の色ハ云〻の花の頭字を取りしものなり斯の如く落書には一定の極りなくして人各〻其隨意ヨ書き表はすへし彼の兒島高德か櫻樹を白ふし

天莫空勾踐一　時非無范蠡一

と記したる句も落書なり又源三位入道頼政か

たのむへき影しなければはの下にしゐをひろふて世を渡るなり

と詠して三位に昇りたりとハふ和歌も落書ゐり落書の及ふ所廣ハ哉

# 小話

○一ト口噺

庭ゑ芥かたまりましたから掃きました……夫れは葉がかり

劔術道具をよく掃除して仕舞ました……夫れはお面胴

學校の生徒が揃ひました……体操（大層）

雷様い畏ひね……成程（鳴程）

章魚の足は八本ざね……如何ふも（烏賊）

○蕎麥の洒馳走

深谷　小林範平



私しの蕎麥の洒馳走になり升て返へらうと致しましたら主人ぐの誠に御蕎麥つ樣と申しましたかふ私しはどう致すましてと答ました

蛸好きは　足を喰ひ　下手な職人　尻を喰ひ

なま貝すきい　目さを喰ひ　鯛ときい　眼玉を喰ひ

男達　人を呑み込み　豆腐好きは　奴を喰ひ

劔術扱ひ　あてみを喰ひ　下手な上るり　やりを喰ひ

こけに廻れは　劔つくを喰ひ　阿呆におれは　屁を嚙まさる

○青物年季証文之事

一此せりと申女　出生はみかんの國ちんび郡もからド村　心松茸　せう露　ゐるもの也へ　香さけきうり樣へ　午旁　かうく　に　さんせう仕し然るよは　うどの三

月より芋の三月まで　中年　九年坊とあひ定め浮取次として　くさッさ　金かん　さッさ　五ッぼん　請取るところでん　ぎッしようかなり　二股大根　三ッ葉〳〵にい　得共　ちよッとも　そッともいも頭ぶへ　けし程も　おまふりかけヤさせ間敷い仍て　宗旨は代〻南無妙法れんけ草　淺草のり三枚　くるい山道根寺　ぎんゐん和尚に紛れ　無沒座い青物一札仍て如件

桃栗三年柿八月蒲子の吉日

奉公人　せ　ど

請　人　竹の幸右衛門

大根屋瓜右工門殿

## 唱歌　門



○　小野道風奮勵の々

人〻心か大切よ　一心凝さる其時は　石にも矢の立つさめしあど　小野道風少くして　書筆の修業よ退屈し　池の邊に至どしに　汀の柳枝垂れて　水上さかく靡くをは　蛙　いこれに眼をかけて　我か餌食とやふもひけん　身を跳らせて飛たれと　其あひ三尺餘　どあど　其半にもいたらぬを　蛙は屈するけしきなく　上どては落ち　落ちて〻上ど　ちゝに心をくゞきしゞ　漸く高く飛増して　終に柳に飛付けど　道風深く鑑みて　我い　人など男子など　いので小虫ゐ劣らんやと　茲に感奮興起して　晝夜を分たぞ勉じ　書法の奥義を極めつゝ　天下に無雙の能筆と　仰かれたるこそ殊勝なれ

○　忠　臣

（正成）　笠置の山を出しよどさして行衛は定めなき君をやすむる績は湊川にそ殘どける

（正行）　國の爲どて大丈夫ぞ四條畷に散る花は櫻井驛の戒を守どて香はし菊の花

（高德）　春の彌生よ夜をこめて君ゐ告んとますらをが大和心と櫻木に殘せし跡こそ匂ひ

けれ

（長年）よるべも涙の荒磯を船上山にとゝめてし君が心に忘られぬ忠義は山よりも尚高し

（義貞）雨や霰と飢れ射る矢面に立ちて只ひとりいなつまあやなす二タふりの劍に輝く

忠と勇

◎ 伊國の光

（皇統一系）遠き神代のむかしよりたゞ一トすぢに流れ來て今も絶せぬ五十鈴川深き心

はくみてしれ

（日章旗）雲井に高く輝きて伊稜威かしこき日の本の旭のかげの旗手よゝ外國人もなひ

くらむ

（日本刀）打てきたへし劍太刀光ゝ寒し秋の水我が日の本の丈夫ゝ誰も心におさむらん

（櫻花）春の野山に咲出て人の惜むもかへりみず潔く散る櫻こそ大和男子のこゝろなれ




# 生徒募集廣告

來ル三月中當校定期試業結了スベキニ付四月一日ヨリ普通豫備両科共試驗ノ上入學ヲ許ス志願ノ者ハ三月廿一日迄ニ履歴書相添ヘ入學願書差出スベシ

但規則書望ミノ者ハ貳錢郵劵封入申越スベシ

明治廿五年三月

北埼玉郡不動岡村

埼玉英和學校

けれ

（長年）よるべも涙の荒磯を船上山にとゝめてし君が心に忘られぬ忠義は山よりも尚高し

（義貞）雨や嵐と亂れ射る矢面に立ちて只ひとりいなつまあやなす二タふりの劍に輝く

忠と勇

## ㊁ 浦國の光

（皇統一系）遠き神代のむかしよりただ一トすぢに流れ來て今も絶せぬ五十鈴川深き心

はくみてしれ

（日章旗）雲井に高く燦きて海陸威かしこき日の本の旭のごとき旗手よい外國人もなひ

くらむ

（日本刀）打てきたへし劔太刀光い密し秋の水我が日の本の丈夫い誰も心にかさむらん

（櫻花）春の野山に咲出て人の惜むもかへりみず潔く散る櫻こそ大和男子のこゝろなれ

---


# 生徒募集廣告

來ル三月中當校定期試業結了スベキニ付四月一日ヨリ普通豫備両科共試驗ノ上入學ヲ許ス志願ノ者ハ三月廿一日迄ニ履歴書相添ヘ入學願書差出スヘシ

但規則書望ミノ者ハ貳錢郵券封入申越スベシ

明治廿五年三月

北埼玉郡不動岡村

**埼玉英和學校**

# 廣告

活版、石版、銅版、印刷概目

一役場用書式、諸用紙類　一學事諸表、諸罫紙類、受取書、帳簿
一雜誌　書籍　諸規則類　一株券、卒業証、會員證、證印紙章標
一賞狀、名刺、商標、切手　一廣告類、諸証書、和歌、詩集、發句

右之外總テ印刷ニ關スル者

口演

今回弊舍義新規精良ノ器械ヲ以テ石版銅版共注意ニ注意ヲ加ヘ如何ナル急速ノ御注文ト雖モ必ス期日ヲ誤ラス廉價精巧ニ印刷進調可仕候間江湖諸君何卒倍舊陸續御注文被仰付度奉望候

明治廿五年三月　頓首

精英舍

埼玉縣熊谷本町
高橋勘七郎
謹白

## 廣告

來ル四月ヨリ一層改良ヲ加ヘ埼玉小學雜誌陸續發刊致シ且ツ折々**作文大觀**ノ如キ少年書類出版致シ候間續々投書被成下度願上候以上

明治廿五年三月　埼玉小學雜誌社


明治廿五年三月二十三日印刷出版

[redacted]

編輯人　埼玉縣大里郡熊谷町百番地　江原近平

發行人　埼玉縣大里郡熊谷町拾五番地　金森正之助

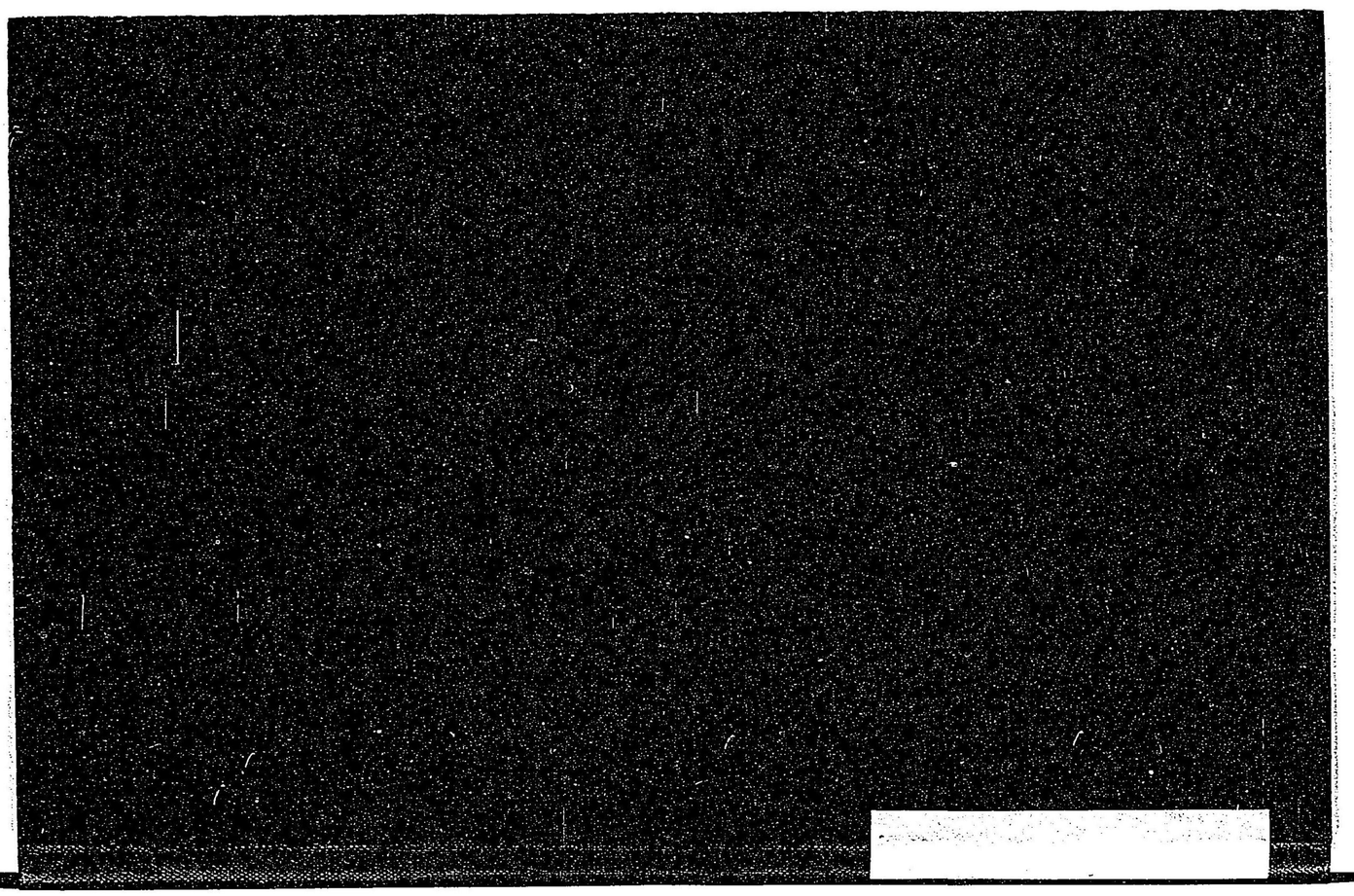
印刷人　埼玉縣大里郡熊谷町百廿壹番地　高橋勘七郎

發行所　埼玉縣大里郡熊谷町拾五番地　埼玉小學雜誌社


## 賣捌所

東京本郷區元富士見町　盛春堂
埼玉縣大里郡熊ヶ谷町　近榮堂
仝　杉浦平左工門
仝　北足立郡大宮町　岩井彦次郎
仝　北埼玉郡忍町　魁華堂
仝　入間郡所澤町　尙文堂
仝　川越町　山合幸
仝　入間川町　吉田定平
仝　南埼玉郡岩槻町　水野武平
仝　秩父郡大宮町　三育社
仝　北葛飾郡栗橋町　小林百代
仝　北足立郡浦和町　埼玉用達會社
仝　鴻巣町　岡部金之助
仝　南埼玉郡越ヶ谷町　協立舍

熊谷精英会活版所印行



特19
48

速成教育 作文大観

国立国会図書館

081090−000−1

特19−48

作文大観

江原　近平／編

M25

DAC−5424